先生方と共に創る 教育情報&オピニオン誌
［ビューネクスト］高校版

VIEWnext

2026 10 October

特集 生成AI時代
生徒の思考をどう深めるか？

表紙の学校
高知県立
高知国際中学校・高校



今号の掲載校

青森県立七戸（しちのへ）高校 / 山形県立酒田光陵高校 / 埼玉県立大宮高校 /
滋賀県・私立立命館守山中学校・高校 / 静岡県・静岡市立清水桜が丘高校 /
宮城県・私立東北学院中学校・高校 / 福井県立若狭高校 /
大阪府・私立追手門（おうてもん）学院中・高校 / 長野県松本県ケ丘（がおか）高校 / 静岡県立駿河総合高校

Benesse

先生なら、どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

「自分には価値がない」。自己否定をする生徒の苦悩を受け止め切れなかった担任としての後悔

青森県立七戸（しちのへ）高校
山下友美

やました・ともみ● 同校に赴任して10年目。福祉健康系列主任。福祉科。「産業社会と人間」において企業見学を実施するなど、生徒の進路意識の向上に力を入れてきた。学習状況や進路観、発達面などで生徒の多様化が進む中、生徒について教師間で対話する重要性が一層増してきていると考えている。



感受性がとても豊かな面と繊細すぎる面を持ち合わせているＡさんと出会ったのは、私がまだ若手と呼ばれる年齢の時でした。Ａさんの保護者は、中学校時代は欠席しがちだったＡさんが毎日高校に通えるのか、随分心配しているようでした。また、些細なことで感情的になり、反抗的な態度を取ることもあるＡさんに手を焼いている様子もうかがえました。しかし、そうした保護者や担任の私の不安をよそに、Ａさんは順調に登校を続け、極めて優秀な成績で１年次を終えました。

ところが２年次の夏季休業明けから、Ａさんは無断欠席を繰り返すようになりました。Ａさんが登校した時には、私は朝のＳＨＲの後や下校前の掃除の時間などに、何気ない口調で「どうしたの？」「大丈夫？」などと声をかけました。しかしその度に、Ａさんは私と目を合わせようとせず、追い詰められた表情で「自分のことが嫌だ」とつぶやき、涙ぐむのでした。「自分は見た目が悪い」「字も汚い」「自分には価値がない」。そうした自己否定の言葉を口にするＡさんに私は、「そんなことはないよ」と伝えました。「あなたの笑顔はとても魅力的」「字だって私よりも上手」。そして、「１年生の時に頑張って登校を続けたことは本当に立派だった」「勉強だってできる。あなたには誇れるところがたくさんあるよ」などとＡさんのよいところを挙げて励ましました。しかし、そういった言葉がＡさんの心に響いているという手応えはありませんでした。結局Ａさんは、自身の希望で２年次修了後に通信制課程の高校に転学しました。

その後、様々な生徒と接して教師としての経験を積む中で、次第に私は、Ａさんがどのような生きづらさを抱えていたのか、本人の言葉に十分に耳を傾けられていなかったことに気づき、後悔するようになりました。「成績はよいし、励ませば学校に戻ってくる」。そのように、教師の自分にとって都合のよい未来を描くことが「生徒を信じること」だと私は勘違いしていたのです。

あの時、Ａさんの苦悩をまずはそのまま受け止めていたらどうなっていたのだろうか。苦しみを抱える自分をそのまま認めてくれて、まとまらない自分の言葉にじっと耳を傾けてくれる人が近くにいることで、Ａさんは救われたかもしれない。Ａさんへの申し訳なさを抱えたまま、多様な生徒を「信じる」とはどういうことなのか、今も考え続けています。

生徒を信じること、生徒に寄り添うことについて考え続けた山下先生。ウェブオリジナル記事では、様々な生徒との出会いを通して気づき、深められた自身のあり方を語っています。ぜひご覧ください。

https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article38161/

イラスト：カモ

VIEWnext 高校版 10 2026 October Contents

巻頭 **先生なら、どうしますか？**

「自分には価値がない」。自己否定をする生徒の苦悩を受け止め切れなかった担任としての後悔
青森県立七戸（しちのへ）高校 山下友美

2 **特別企画**

次期学習指導要領「審議まとめ」の重要点と、今から取り組めること
文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教育課程企画室長 栗山和大（かずひろ）

6 **特集**

生成AI時代 生徒の思考をどう深めるか？

8 課題整理 東京学芸大学 教育学部 教授 高橋 純
12 事例1 山形県立酒田光陵高校
15 事例2 埼玉県立大宮高校
18 事例3 滋賀県・私立立命館守山中学校・高校
21 本特集を振り返って 国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 部長 白水始（しろうずはじめ）

24 **指導変革の軌跡**

お勧めの分掌：管理職 教務担当 進路担当 担任

静岡県・静岡市立清水桜が丘高校
学校の特色化・魅力化

28 **シリーズ 高×大・専・社接続の視点で考える**

お勧めの分掌：管理職 教務担当 進路担当 担任

キーワード **非認知能力**
学校事例 **宮城県・私立東北学院中学校・高校**

32 **ウェブ連載記事 ダイジェスト**

「主体的・対話的で深い学び」を実装する授業デザイン

お勧めの分掌：管理職 教務担当 進路担当 担任

歴史総合
福井県立若狭高校 松村一太朗

物理
大阪府・私立追手門（おうてもん）学院中・高校 土谷啓介

「やらされ探究」から「マイ探究」へ！

お勧めの分掌：管理職 教務担当 進路担当 担任

長野県松本県ケ丘（あがたがおか）高校
静岡県立駿河総合高校

そうだったのか！ 教育課程

お勧めの分掌：管理職 教務担当 進路担当 担任

40 **Reader's VIEW**

https://view-next.benesse.jp/
本誌記事は、ウェブサイトVIEWnext ONLINEでもご覧いただけます。

印刷製本／株式会社協同プレス　編集協力／有限会社ペンダコ　撮影協力／加藤 武、岸 隆子、ヤマグチイッキ　イラスト協力／カモ

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。

※本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。©Benesse Corporation 2026

次期学習指導要領「審議まとめ」の重要点と、今から取り組めること

2026年10月、「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」（以下、審議まとめ）が中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において報告された。高校の次期学習指導要領は29年度からの先行実施を経て、32年度の入学生から順次実施される予定だ。「審議まとめ」でつかんでおきたい次期学習指導要領の重要点と、高校現場が今から取り組めることについて、文部科学省の栗山和大（かずひろ）教育課程企画室長に話を聞いた。





聞き手
VIEWnext 編集部 統括責任者
柏木 崇

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教育課程企画室長
栗山和大（かずひろ）

多様な子どもたちの「深い学び」を確かなものに

柏木　まずは次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方について教えてください。

栗山　次期学習指導要領に向けた検討は次の3つの方向性を基に進めています（**図1**）。1つめは「主体的・対話的で深い学びの実装」です。現行の学習指導要領で示されたその視点からの授業改善に、多くの学校・教師がこれまで取り組んできました。ただ、それはまだ道半ばであり、生成AIの浸透を始めとする社会の大きな変化の中で、「深い学び」の重要性がより一層高まっているという認識に基づいています。

　2つめは「多様性の包摂」です。不登校や外国籍、特別な支援を要するなど、多様な背景を有するすべての子どもたちに「深い学び」を保障するという視点です。同時に、そうした多様な子どもたちが集う学校での学びの価値に着目し、一人ひとりの個性や特性、背景を踏まえた資質・能力の育成を目指す仕組みを整えていきます。

　3つめは「実現可能性の確保」です。「主体的・対話的で深い学びの実装」や「多様性の包摂」に学校が無理なく取り組めるよう、時間的な「余白」を教師や子どもに創出するための制度や環境を整備していきます。

　それらを三位一体で具現化することで、変化の激しい時代にすべての子どもが「自らの人生を舵取りすることができる　民主的で持続可能な社会の創り手」となっていく教育の実現を目指すのが次期学習指導要領です。

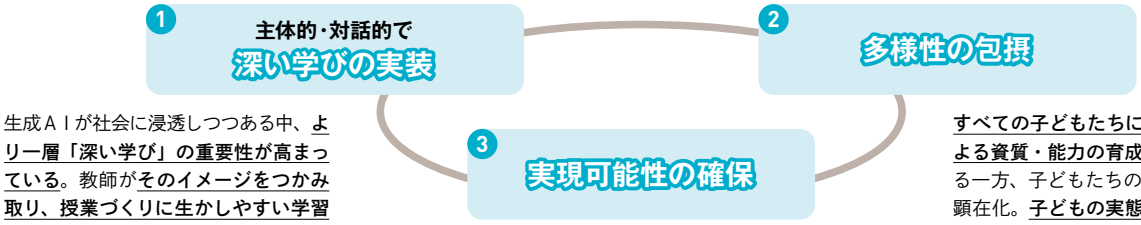
「好き」を育み、「得意」を伸ばし、「対話と合意」の力を高める

柏木　「『好き（興味・関心）』を育み、『得意』を伸ばす」と「当事者意識を持って、自分の意見を形成し、対話と合意ができる」も次期学習指導要領のキーワードだと思いますが、それらと「自らの人生を舵取りすることができる　民主的で持続可能な社会の創り手」は、どのような関係にあるのでしょうか。

栗山　社会の変化が激しい時代において、それに適応し続けるには人生を主体的にアップデートする「自らの人生を舵取りする力」が不可欠です。ただ、自らの人生を舵取りすることは1人でできるものではなく、自らの人生は社会の一員として他者とかかわりながら切り開いていくものです。だからこそ「民主的で持続可能な社会の創り手」を育成することも必要になります。

　それらを育んでいくために必要なものとして位置づけているのが、「『好き

図1　次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方～あらゆる方策を活用し、三位一体で具現化～



生成ＡＩが社会に浸透しつつある中、**より一層「深い学び」の重要性が高まっている**。教師が**そのイメージをつかみ取り、授業づくりに生かしやすい学習指導要領**とし、「主体的・対話的で深い学び」の実装を図る。

①②の実現・両立は容易ではなく、教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合い、実現可能性を確保する必要。**教育課程において教師と子どもに「余白」（多様な子どもたちの深い学びを実現するための時間的余裕）を創出**し、豊かな学びにつなげる。

すべての子どもたちに「深い学び」による資質・能力の育成を図る必要がある一方、子どもたちの多様性は格段に顕在化。**子どもの実態や課題に応じた教育課程・学習指導を充実・可能とする**ことで、すべての子どもたちを包摂し、必要な資質・能力を育成する。その際、民主的で持続可能な社会の創り手を育てる上で、多様な他者と学ぶ学校が大きな役割を果たす。

多様な子どもたちの「深い学び」を確かなものに

学びをデザインする高度専門職としての教師、デジタル学習基盤を始めとする基盤整備、総合的な勤務環境整備

生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、
自らの人生を舵取りすることができる　民主的で持続可能な社会の創り手をみんなで育む

「好き（興味・関心）」を育み、「得意」を伸ばす　×　当事者意識を持って、自分の意見を形成し、対話と合意ができる

※中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」を基に編集部で作成。

（興味・関心）』を育み、『得意』を伸ばす」ことと、「当事者意識を持って、自分の意見を形成し、対話と合意ができる」ことです。自分の「好き」や「得意」が明確になれば、各自の違いが自然と現れ、それが他者との対話や合意形成の契機となります。そして対話や合意形成を行うには、自分なりの意見や主張を持つことが必要であり、それらは「好き」や「得意」に基づいて形成されるものです。したがって、個性の伸長と対話・合意形成は互いを支え合い、高め合う相補的な関係にあると捉えています。

「深い学び」を構造化し、教師の授業づくりを支援

柏木　「主体的・対話的で深い学びの実装」において、「深い学び」が強調されていることはどのように受け止めればよいでしょうか。

栗山　授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学び」を一体的に捉えるという大前提は現行の学習指導要領と変わりありません。ただ、「主体的な学び」「対話的な学び」に比べて「深い学び」は、現場の先生方がそのイメージをつかみ取りにくいという課題がありました。さらに生成ＡＩの浸透に伴い、子どもが自ら考えて深く学ぶことの重要性がより高まっています。

　そうした背景から、次期学習指導要領では全教科・科目において、「深い学び」を「知識及び技能に関する統合的な理解（以下、統合的な理解）」と「思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮（以下、総合的な発揮）」によって構造化して示すことにしました（P.4 図2）。「深い学び」の解像度を上げ、先生方がそれを実現するための授業づくりを具現化しやすくすることが目的です。

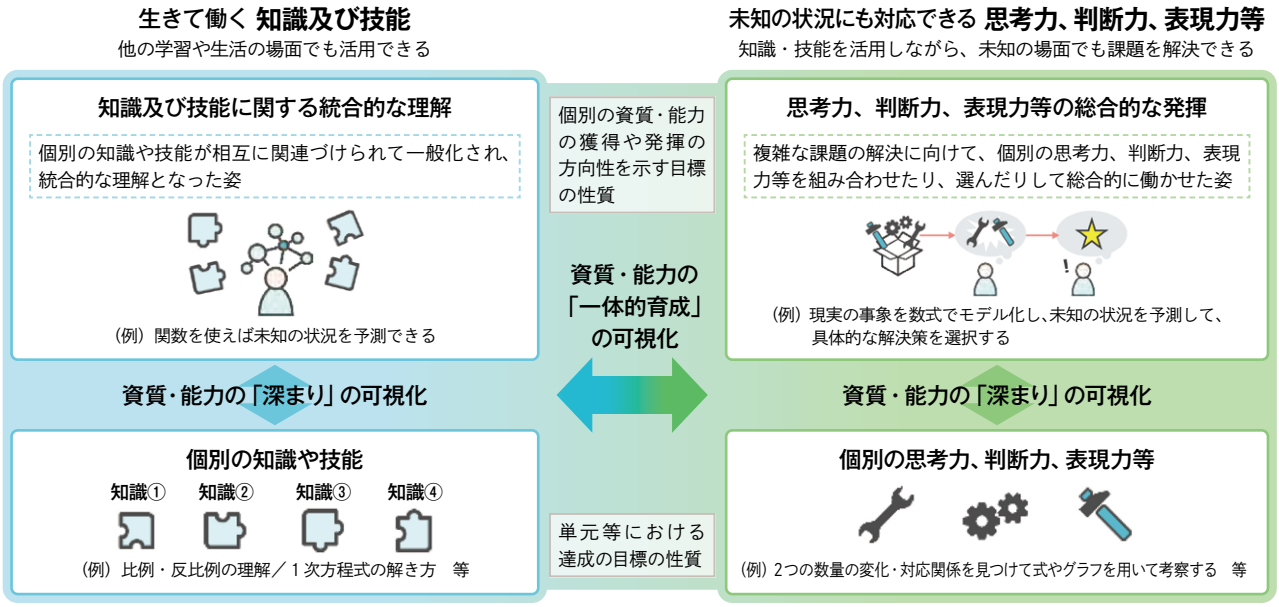
柏木　「審議まとめ」の第3部には、各教科の目標や見方・考え方、そして校種ごとの「統合的な理解」と「総合的な発揮」の案が示されていました。それらは「主体的・対話的で深い学び」を授業で実現できている教師が自然と志向しているものだと感じました。

栗山　「統合的な理解」や「総合的な発揮」は難しく捉えられがちですが、全く



くりやま・かずひろ　2006年度、文部科学省に入省。京都府教育委員会学校教育課長、初等中等教育局財務課課長補佐等を経て、24年度から現職。

図2　「資質・能力の深まり」と「資質・能力の一体的育成」の可視化による「深い学び」の実現



- 知識の理解も、情報の丸暗記にとどまらない概念としての習得や深い意味理解が重要。思考力、判断力、表現力等も、社会や生活で直面する未知の状況でも身につけた力を総動員して課題解決につなげていけるよう「質」を高めることが重要（資質・能力の「深まり」）。
- ある程度の知識・技能なしに思考・判断・表現することは難しいし、思考・判断・表現を伴う学習活動なしに、知識の深い理解と技能の確かな定着は難しい（資質・能力の「一体的育成」）。

→そうした**「資質・能力の深まり」と「資質・能力の一体的育成」を学習指導要領上で可視化し、資質・能力の関係性の理解や、それらを一体的に育成するための教師の単元・授業づくりを助け、「深い学び」（＊）を授業で具現化**しやすくする。

＊次期学習指導要領における「深い学び」は、「**個別の『知識及び技能』、個別の『思考力、判断力、表現力等』について、一体的に育成しつつ、それらの統合的な理解や総合的な発揮を促す学びのプロセス**」といえる。

※中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」を基に編集部で作成。

新しい考え方を示しているわけではありません。「資質・能力の深まり」と「資質・能力の一体的育成」を可視化し、すべての教師の共有財産として活用できるようにするためのものです。

柏木　学校現場では様々な環境の変化に伴い、教師間で学び合う機会が以前より減り、指導の継承が課題となっています。だからこそ、資質・能力の関係性の理解や、それらの一体的育成のために、「統合的な理解」と「総合的な発揮」が示されたことには大きな意義があると思います。

栗山　現行の学習指導要領で資質・能力の3つの柱が示され、その育成の重要性が浸透したからこそ、「資質・能力の深まり」や「資質・能力の一体的育成」について議論することができていると捉えています。そうした点からも、次期学習指導要領は現行の学習指導要領を継続・発展させるものと言えます。

柏木　授業づくりや教師間の指導の継承がしやすくなる半面、例えば「学習指導要領で示された『統合的な理解』と『総合的な発揮』をそのまま生徒に教えればよい」といったように、授業や指導の形式化に陥らないように注意することが必要だとも思いました。

栗山　おっしゃる通りです。学習指導要領の構造化は、資質・能力の関係性の理解や、その一体的育成に向けた単元構成、授業づくりを支援するためのものです。すべての子どもに「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりの価値は一層高まっています。先生方には、本質的な授業改善に向き合っていただきたいと考えています。

授業改善のヒントになる各教科・科目の改訂案

柏木　「審議まとめ」は膨大なページ数に上ります。どこに着目して理解を深めていくとよいでしょうか。

栗山　まずは「審議まとめ」の目次を見て、ご自身の立場や関心、抱えている課題に関係していそうなところからぜひ読んでみてください。「審議まとめ」はスライドの形で作成し、第1部・第2部の内容は第3部で図解しています。その図解で全体像をつかんでから第1部・第2部を読むと、次期学習指導要領に対する理解が深まると思います。

「審議まとめ」の全ページを読めなくても構いません。ただ、第1部には教育課程の仕組みと指導のあり方を一体的に改革するという次期学習指導要領の根幹となる考え方が示されているため、すべての先生方に読んでいただきたいと思っています。

その上で現場の先生方には、第2部第2章や第3部のご自身の担当教科・

図3　高校の教育課程の柔軟化の仕組みの方向性（イメージ）

2　1単位の計算

50分×17コマで1単位を標準（新しい算定による単位を便宜的に「新単位」という）

1　柔軟な組み替えを可能に

「各科目内容の一部または全部について他科目への移行・統合」し、科目の柔軟な組み替えを可能に

組み替えの要件のポイント

❶ 元の教科・科目の目標の趣旨を損なわない
❷ 教育課程全体として、組み替え前と同様の成果が期待される
❸ カリキュラム・ポリシーとの関連で、変更の趣旨・内容を公表し、生徒・保護者等に説明する

科目の内容の取り扱い

- 従前同様、生徒の実態を踏まえ、特に必要な場合は「基礎的・基本的な」事項に重点を置くなど、内容を選択して扱うことが可能
- その上で、「発展的・探究的な」事項に重点を置いた選択的な取り扱いも可能

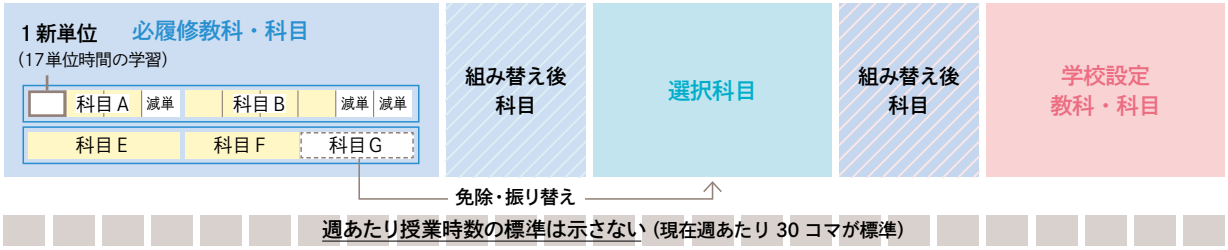
とする

5　学校設定教科・科目の単位数の上限

卒業単位に含められる学校設定科目の単位数上限について

- 普通科→56新単位
- その他普通教育を主とする学科→70新単位

に増加させる



3　減単の考え方

- 「一定の限度の下で減単可」という考え方が基本
- 現在減単できない標準が2単位の必履修科目についても、1新単位の範囲内で減単を認める
- 各必履修「教科」に係る科目の履修単位数の合計が3新単位以下となる減単は不可

4　科目の履修免除や要件のポイント

❶ 社会的信頼性が確立した外部試験により、免除科目の知識・技能の習得がおおむね判断可能
❷ 振り替え科目等の履修により、免除科目の資質・能力を発展的に育成可能で、総合的な代替性がある
❸ 生徒の実態・希望を踏まえ、資質・能力の育成に大きく上回る成果が期待できる

履修免除の対象科目

- 外国語・数学を対象に制度運用を開始していくことを念頭に検討
- 具体的な外部試験の種類や、履修免除に必要な級の水準等については、外国語及び算数・数学の方向性を踏まえ解説で具体的に記載

6　必要な改善・質確保のための仕組み

それらの仕組みの不適切な運用を防ぎ、国・都道府県等・各学校が必要に応じて改善を図り、質を確保できるようそれぞれの役割を整理

※中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」を基に編集部で作成。

科目のページを読んでいただけたらと思います。それからまた第1部に戻ると、次期学習指導要領に通底する考え方の理解がより進むはずです。

柏木　「審議まとめ」には、先生方が日頃取り組んでいる授業改善のヒントが詰まっていると感じました。

栗山　個に応じた学習過程を充実させる自己調整の促進や学習方略の例など、明日からの授業づくりにも生かせる内容が「審議まとめ」には盛り込まれています（＊）。そうしたものは次期学習指導要領の実施を待たずにどんどん取り入れていただき、授業改善を図っていっていただければと思います。

自校の教育課程の見直しを今から検討することが大事

柏木　高校の管理職の先生方が着目すべき点はどこでしょうか。

栗山　高校においては、第1部第1～3章に加えて、第4章（3）「高等学校段階における単位制の柔軟化等」や第8章（2）「高等学校の教科・科目構成と標準単位数の在り方」が極めて重要です。次期学習指導要領では教科・科目の組み替えや減単・増単、履修免除などが弾力的な仕組みとなることで、教育課程の柔軟な編成が可能になる見通しです（図3）。学校の統廃合や生徒の多様化、さらには産業構造が変化する中で、教育課程は自校の強みや特色を打ち出す柱となります。しかし、教育課程の編成は容易に結論が出せるものではなく、組織として編成に関する知見や構想を蓄積しておくことが重要です。早い段階で校長が副校長や教頭、教務主任との議論を始め、29年度から予定されている先行実施に備えることが未来の学校づくりにつながります。

柏木　弊誌でも、教育課程の柔軟化に向けた検討を各校がいつでも始められるよう、関連するコーナーを連載しています（P.35参照）。これまでは理想の生徒像や学校像があっても、制度上の制約で実現が難しい面があったかと思います。しかし、次期学習指導要領ではそうした思いを実現させる仕組みや選択肢が整います。

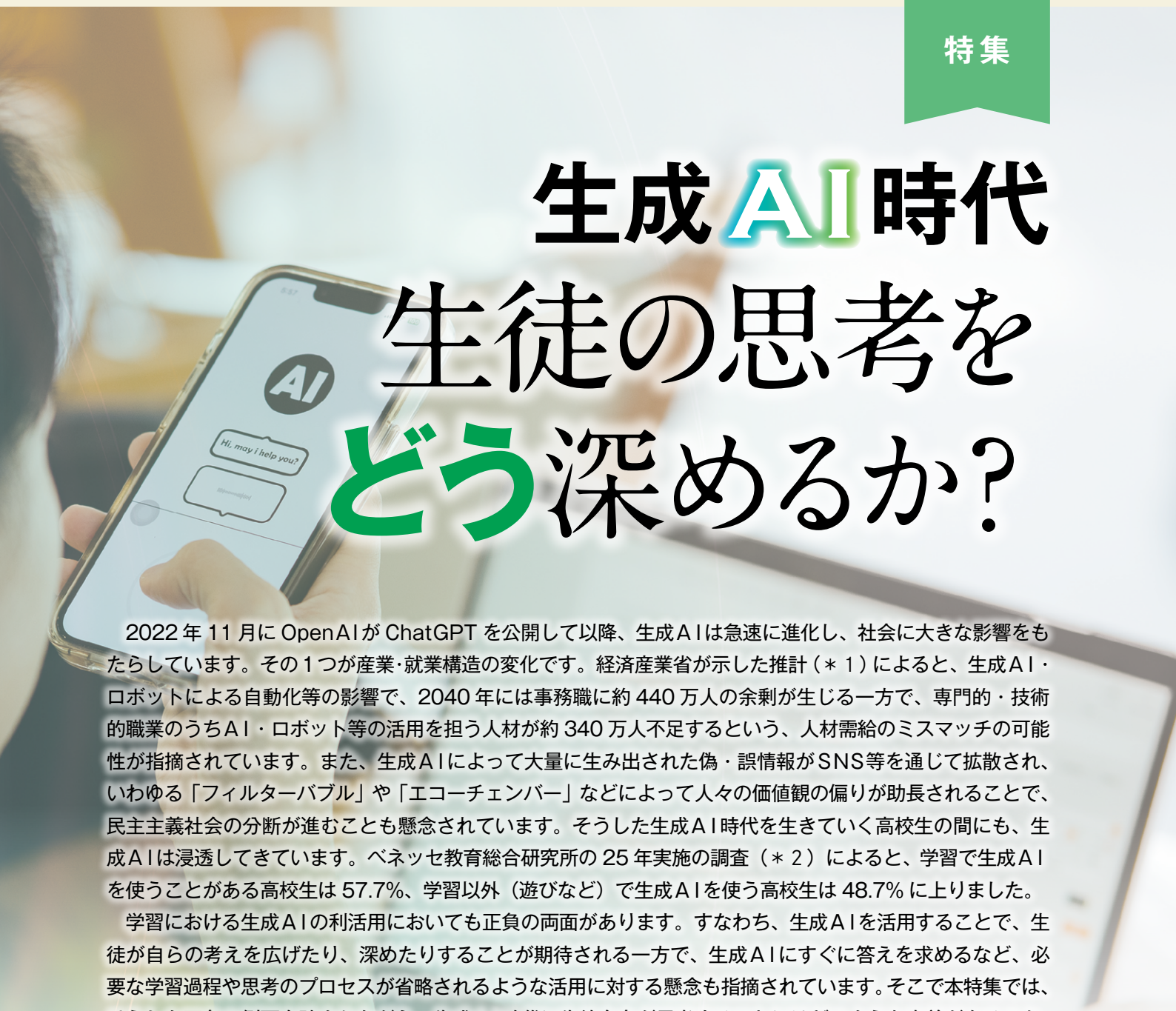
栗山　まさにカリキュラム・マネジメントを実質化し、目指す学校像を実現できる環境が整いつつあります。次期学習指導要領を学校や授業を変える最大のチャンスと捉え、管理職の先生方にはリーダーシップを発揮して今から動き出していただきたいと思います。

柏木　自校や自身の課題に引きつけながら「審議まとめ」を読み解けば、各校・各教師は今できることから一歩を踏み出していけるのではないかと感じました。本日はありがとうございました。

＊　中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」の第3部 P.449～452。

特集

生成AI時代 生徒の思考を どう深めるか？



2022年11月にOpenAIがChatGPTを公開して以降、生成AIは急速に進化し、社会に大きな影響をもたらしています。その1つが産業・就業構造の変化です。経済産業省が示した推計（＊1）によると、生成AI・ロボットによる自動化等の影響で、2040年には事務職に約440万人の余剰が生じる一方で、専門的・技術的職業のうちAI・ロボット等の活用を担う人材が約340万人不足するという、人材需給のミスマッチの可能性が指摘されています。また、生成AIによって大量に生み出された偽・誤情報がSNS等を通じて拡散され、いわゆる「フィルターバブル」や「エコーチェンバー」などによって人々の価値観の偏りが助長されることで、民主主義社会の分断が進むことも懸念されています。そうした生成AI時代を生きていく高校生の間にも、生成AIは浸透してきています。ベネッセ教育総合研究所の25年実施の調査（＊2）によると、学習で生成AIを使うことがある高校生は57.7%、学習以外（遊びなど）で生成AIを使う高校生は48.7%に上りました。

学習における生成AIの利活用においても正負の両面があります。すなわち、生成AIを活用することで、生徒が自らの考えを広げたり、深めたりすることが期待される一方で、生成AIにすぐに答えを求めるなど、必要な学習過程や思考のプロセスが省略されるような活用に対する懸念も指摘されています。そこで本特集では、そうした正負の側面を踏まえながら、生成AI時代に生徒自身が思考することにはどのような意義があるのか、教師はどのようにして生徒の思考を深めることができるのかについて、考えてまいります。

VIEWnext 編集部 統括責任者　**柏木 崇**

P.8　課題整理
生成AI時代だからこそ、「深く思考する」教育活動の充実を
東京学芸大学 教育学部 教授　**高橋 純**

P.12　事例1
入学直後に生成AIの使い方を学び、学校全体で情報教育を推進
山形県立酒田光陵高校

P.15　事例2
「思考する喜び」を実感できるよう、生成AIを活用した授業改善に挑む
埼玉県立大宮高校

P.18　事例3
生成AIが生徒の学びに適切な負荷をかけ、教科学習・探究学習を深める
滋賀県・私立立命館守山中学校・高校

P.21　本特集を振り返って
生成AIを学びのパートナーとし、人生のオーナーシップを育む
国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 部長
教育データサイエンスセンター 副センター長　**白水（しろうず） 始（はじめ）**

＊1　2026年3月5日産業構造審議会経済産業政策新機軸部会「2040年の就業構造推計（改訂版）について」。
＊2　ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2025」（2025年7～9月に実施。高1～3生1,927人の回答結果）。

©Chong Kee Siong

生徒が生成ＡＩを利用して志望理由書や履歴書を作成すると、本人のスキル以上の文章に仕上がる傾向がある。美辞麗句を連ねた文章を基に面接試験に挑むと、書いてある文章と実際に面接で語る内容とに大きな乖離が生じ、それが理由となって不合格となる事例が散見される。不合格にならずとも、志望理由書に書いたこと以外のことに対する質問が多くなり、面接のハードルが極端に上がるという皮肉が生じている。　**三重県・公立**

要領のよい生徒は、作文の課題を、教師の様子をうかがいながら生成ＡＩに任せてしまうこともあり、課題の出し方を迷うことが増えた。
東京都・私立

生成AIの利活用に関して高校現場で生じている問題・課題

音楽の授業の創作の場面では、「イメージや発想を基に音楽を考えること」が本質的で真正な学びの姿だが、そのプロセスや苦労から逃れるために、生成ＡＩに全面的に任せてうまくいかない生徒がいる。その生徒に対して、教師である私はどのような言葉がけをしたらよいか悩む。生成ＡＩを活用すること自体は問題ではないが、人間がかかわるべき部分や、思考・判断・表現すべき部分の大切さをどのように説いていけばよいのか、教師としての資質・能力が求められていることを痛感している。　**北海道・公立**

生成ＡＩを教育に取り込むことの是非が論じられていたのはつい３、４年前のことだったと思うが、今やどのように使うかという視点での議論だと思う。現在、希望者に対しての探究ゼミ活動を行っており、その際、生成ＡＩが搭載された教材「キャリアナビ」（＊）を使用している。志望理由書の壁打ちを行うことにより、生徒の考えの深まりを感じており、とても役に立っている。ただ、どのように使うのかについて、教師のアドバイスがあるかどうかで随分効果に差があるとも感じている。　**三重県・私立**

＊ ベネッセが提供する、進路・探究・表現学習を統合的に支援するデジタル教材。
※『VIEW next』高校版 読者コミュニティーアンケート結果より（アンケートは 2026 年４、５月にウェブで実施）。

本誌の読者コミュニティーアンケートの回答（上記）には、生徒が自身の考えを深めるための壁打ちの相手に生成ＡＩがなっていることから、生成ＡＩの価値を認める教師の声がある一方で、創作や志望理由書の作成といった場面で生徒が自分で考えず、生成ＡＩが出力した結果をそのまま自分の成果物としてしまう事態への危機感を示す教師の声も多く見られた。そして、同アンケートの声にもあるように、学校現場における生成ＡＩの活用は、もはやその導入の是非ではなく、「どのように活用するか」へと論点が移っている。

そこで今号では、生成ＡＩの活用時における課題を整理した上で、生成ＡＩ時代に生徒自身が思考することにはどのような意義があるのか、教師はどのようにして生徒の思考を深めることができるのかについて、考えていく。

先生方とともに考えたい「問い」

生成ＡＩ時代に
生徒自身が思考することにはどのような意義があるのか。
教師はどのようにして生徒の思考を深めることができるのか。

生成AI時代だからこそ、「深く思考する」教育活動の充実を

東京学芸大学　教育学部　教授　**高橋　純**

生成AIの活用によって容易に知識が得られることで、生徒は知識を多角的に吟味し、生きて働くものとして獲得しづらくなるのではないか。その課題の本質は、生成AIの活用そのものではなく、個別の知識の習得を概念的理解へと高める「思考を深める学び」を念頭に教育活動をデザインできているかどうかにあると、中央教育審議会初等中等教育分科会デジタル学習基盤特別委員会委員長代理等を務める東京学芸大学の高橋純教授は指摘する。

育成を目指す資質・能力の視点で生成AIの利活用を考える

河野　生徒の学びにおける生成AIの利活用については、調べ学習が効率よくできたり、英会話の練習に気兼ねなく取り組めたりするといった利点がある一方で、生徒が生成AIによる生成物をそのまま自分の成果物としたり、誤情報・偽情報をうのみにしたりするなど、課題も指摘されています。

高橋　生成AIは社会のあり方そのものを変えつつあるツールです。表面化している課題にのみ対応するのではなく、生成AIの利活用を前提として学びのあり方を再構築する時が来ていると、私は考えています。

以前の学校教育では、個別の知識の理解・習得が重視される傾向にありました。しかし生成AI時代の現在、個別の知識は生成AIが瞬時に供給してくれます。今後の学校教育に一層求められるのは、個別の知識（第1形態）を見方・考え方を働かせて関連づけられた知識（第2形態）にし、それらを構造化・抽象化・一般化して概念的理解（第3形態）へと高める学びです（**図1**）。

つまり、個別の知識を習得して、それを単に再生することが学びの最終目標ではないことを、改めて認識すべき



たかはし・じゅん　横浜国立大学大学院教育学研究科修士課程修了、富山大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。富山大学人間発達科学部准教授等を経て、現職。専門は教育工学、教育方法学。日本教育工学協会会長。中央教育審議会初等中等教育分科会デジタル学習基盤特別委員会委員長代理等も務める。近著に『情報活用能力をどう育てるか 探究的な学びの基礎を養うためのカリキュラムと実践』（共編著、教育出版）。

生成AI時代 生徒の思考をどう深めるか？

聞き手



VIEWnext 編集部 高校領域担当責任者
河野仙一（こうの・せんいち）

だと思います。次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方の1つである「主体的・対話的で深い学びの実装」、すなわち、個別の知識・技能を思考力、判断力、表現力等と一体的に育成しつつ、概念的理解へと高め、さらには多様な概念的理解を統合・再構成しながら、その人らしい個性や人格を形成していくことこそが学びの最終目標となります（**図2**）。

それは決して新しい目標ではありません。教育基本法の第1条には「教育は、人格の完成を目指し、（以下略）」、第2条には「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、（以下略）」とあります。日本の教育が掲げている、そうした本質的な目標を、今こそ見つめ直す必要があるのではないでしょうか。

河野　生成AIの利活用上の問題にとどめず、学びの目標そのものに立ち返り、生徒の思考をどのように深めていくかという視点から、生成AIの利活用を捉えるということですね。

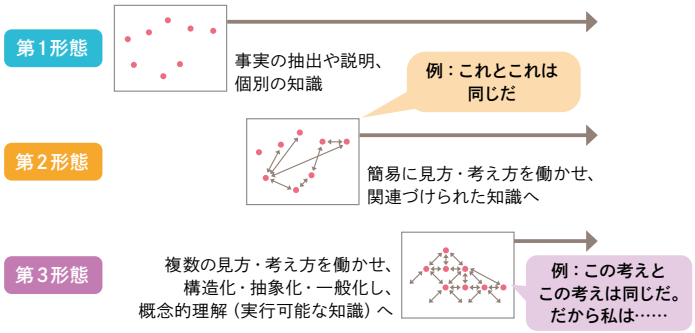
高橋　おっしゃる通りです。育成を目指す資質・能力を培うためにこそ、教育活動の中で生成AIをどのように活用するかを考えることが大切です。

知識の概念化には、自分の経験の参照と、他者との対話が必要

河野　生成AI時代において、「個別の知識」から「関連づけられた知識」、さらに「概念的理解」へと生徒の思考を深めるために、教師にはどのような指導・支援が求められるでしょうか。

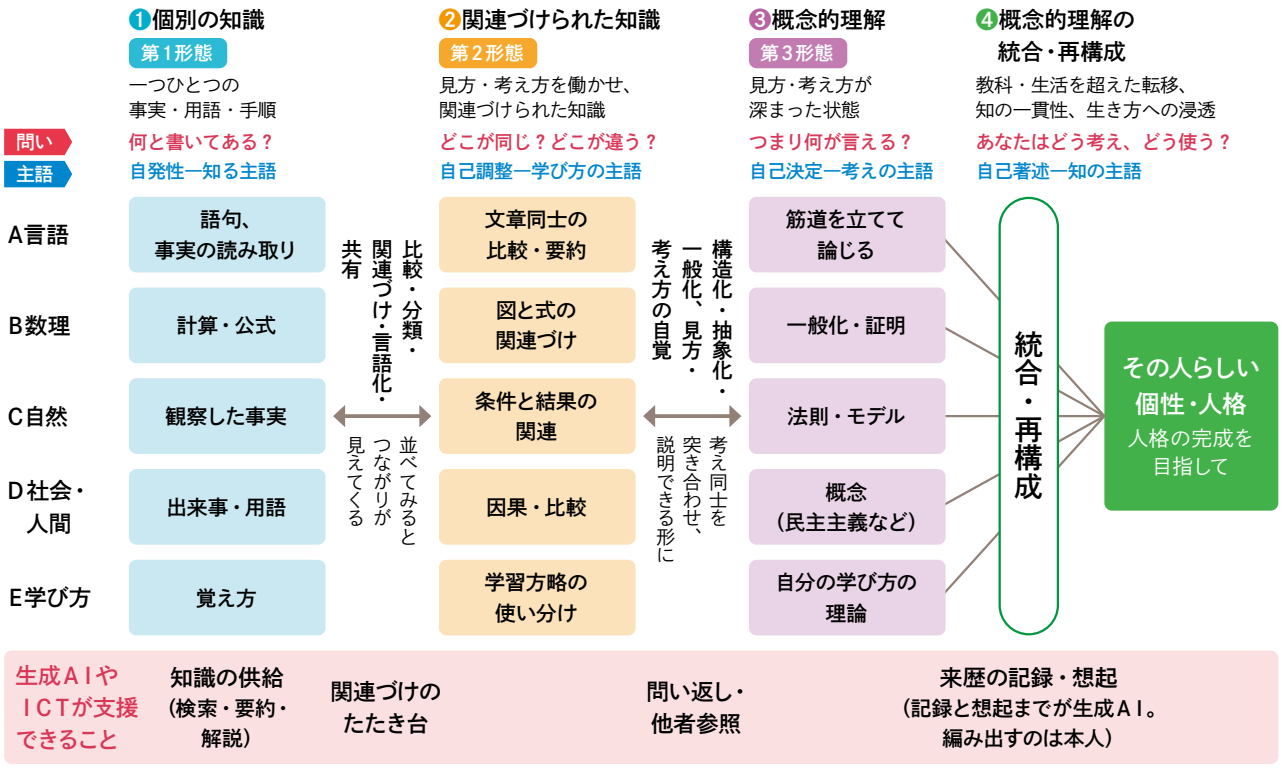
高橋　学習における知識・情報は、「届

図1　思考深度のフレームワーク～思考形態の質的転換を捉える～



※高橋教授の提供資料を基に編集部で作成。

図2　AI時代の資質・能力の構造～個別の知識から、関連づけられた知識・概念的理解へ～



注1）⟷右向き＝統合、左向き＝形成された概念的理解が次の知識の見え方を変える。
注2）生成AIが①個別の知識を供給し、②関連づけられた知識、③概念的理解の操作も代行しうる領域。つまり、「たたき台は生成AI、決めるのは人」である。
※高橋教授の提供資料を基に編集部で作成。

く→読める→分かる→使える→わきまえる」の5層で捉えることができます（**図3**）。生成AIが供給できるのは「読める」様態までです。そこから「分かる」「使える」様態へと高めるには、知識・情報の意味を、生徒が自分の身体・知覚による経験と結びつけて捉えたり、他者との対話を通じて確かめたりすることでしか実現できません（**図3の相互矢印の部分**）。そもそも「分かる」も「使える」も生徒の行為ですから、そうした意味でも生成AIが代替することはできません。

冒頭で河野さんが挙げられた「生成AIの生成物をそのまま自分の成果物にする」「誤情報・偽情報をうのみにする」といった事象では、生成AIから供給された「読める」様態の知識・情報を、自分が「分かる」「使える」様態だと錯覚している、あるいは自分の経験と照らし合わせたり、他者と対話したりして理解する過程を省いてしまっていることに起因します。

河野　そうした錯覚や理解の過程の省略をせず、生徒が自分で考えて「概念的理解」にたどり着くためには、教師は生徒にどうかかわればよいのでしょうか。

高橋　「概念」は学びの過程における試行錯誤などを通じて帰納的に理解されるものです。「何が同じで、何が違うのか」「つまり、何が言えるのか」などと教師が生徒に問いかけることで、生徒が自分の中にある個別の知識を関連づけ、概念化していくための「足場かけ」をするとよいでしょう（**P.9図2の赤字「問い」の部分**）。

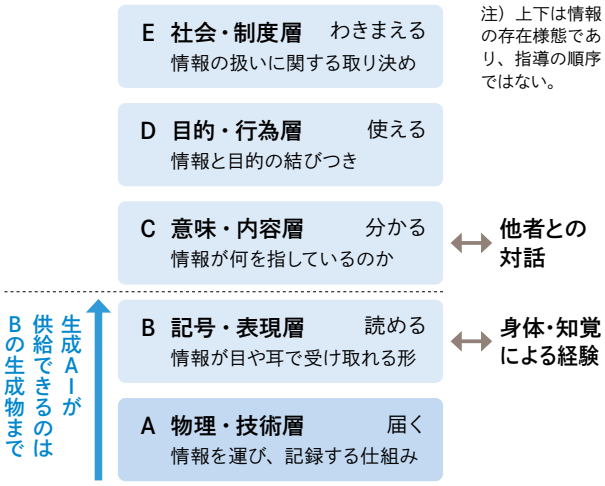
思考の過程を生成AIに委ねさせない指導とは？

河野　現場の先生方からは、**生成AIの利活用に関して高校現場で生じている問題・課題**（P.7）として、生成AIが作成した志望理由書をそのまま志望先に提出してしまい、その後の面接で苦労した生徒の事例や、音楽の授業において創作活動を生成AIにすべて委ねた結果、うまくいかなかった生徒の事例などが挙げられました。

高橋　私は、現場の先生方が教育活動の目的に適した生成AIの利活用の方法を検討しやすくなるよう、国内外の学校における生成AIの利活用事例を分析し、「参照型／応答型」と「考え・作品を扱う／事実を扱う」の2軸で整理した「生成AI活用マップ」を作成しました（**図4**）。

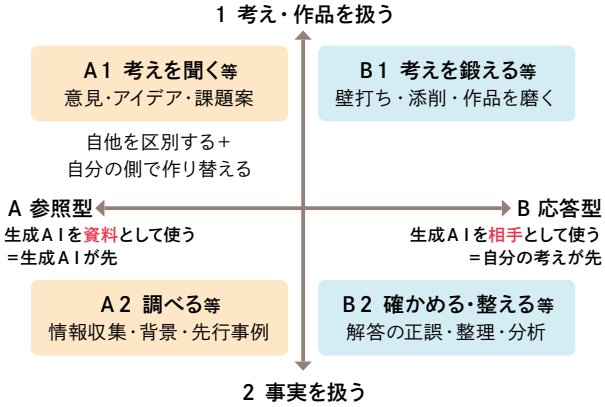
例えば、志望理由書の作成における、望ましい活用は、**図4①**の「応答型×考え・作品を扱う」の象限に位置づく方法である、生成AIで考えを鍛えることです。生徒はまず、自分の進路観や価値観を外化し、生成AIからの問いを受けて自分の考えを整理して深めていくことができ、志望理由書にもそれを示すことができます。一方、先ほどの、生成AIが作成した志望理由書をそのまま志望先に提出してしまい、その後の面接で苦労した生徒の事例は、**図4①**の「参照型×考え・作品を扱う」の象限に位置づく方法である、生成AIに考えを聞くことにあたります。自身の進路観や価値観といった思考を言語化する過程を生成AIに委ねてしまっては、生徒の思考は深まりません。生成AIを活用すること自体は

図3　学習における知識・情報の存在様態　5層モデル



※高橋教授の提供資料を基に編集部で作成。

図4　生成AI活用マップ



❷仕立て：生成AIにどう返答させるか

表し方（形式）	水準（難しさ）	分量（粒度）	立場（役割・視点）	かかわり方（足場かけ）
イラストで	10歳に分かるように	3行で	織田信長として	答えを教えないで

❶頼みごとは、知識・情報を調べたいのか（A2）、文章を添削してほしいのか（B1）など、生成AI活用の目的であり、❷仕立ては、生成AIに頼んだことをどのような形で返答させるかの指示の例。

※高橋教授の提供資料を基に編集部で作成。

問題ではなく、生成AIに思考をすべて委ねてしまうことが問題なのです。

生成AIを活用して生徒の思考を深める3つのポイント

河野　生徒の思考を深める指導・支援における留意点は何でしょうか。

高橋　3つの点が挙げられます（**図5**）。1点目は、思考を深める活動では、まずは生徒に考えを書かせてから生成AIを使わせることです。ただし、考えるための材料集めが目的であれば、生成AIを先に活用しても問題ありません。

2点目は、**図3**に示した「身体・知覚による経験」と知識・情報を結びつける時間や、「他者との対話」を通じて知識・情報の理解を深める場を設けることです。それらはかつて生徒が自分で知識・情報を調べる中で自然に行われていた過程ですが、生成AIが知識・情報を瞬時に供給する今は意図的に設ける必要があります。各生徒の学びの途中過程を生徒間でクラウド上で参照できるようにしたり、教師が見取って助言したりする方法が考えられます。

3点目は、生成AIを「応答型」として活用できるように生徒を支援することです。音楽の授業において創作活動を生成AIにすべて任せた結果、うまくいかなかった生徒の事例では、教師が生徒に「どこを変えたい？」と問いかけ、生徒が「ここを変えたい」と答える、そうしたやり取りができれば、それが自分がどうしたいかを考えるきっかけになり、生成AIとも壁打ちすることができるようになるでしょう。

河野　生徒の思考が深まったかどうかは、どう見取ればよいでしょうか。

高橋　生成AIの登場によって、今後は成果物のみで評価することはなくなっていくかもしれません。成果物以上に、「学びの過程と深さ」を見取ることが重要になります。具体的には、成果物について生徒に説明させたり、「具体例は？」「これを言い換えると？」などと教師が質問したりして、成果物に対する理解を表出させて評価する方法などが考えられます。また、初見の課題に取り組ませることで、概念的理解に至っているかを見取ったり、成果物の作成の履歴から改善の過程を見取ったりする方法も有効です。

管理職も生成AIを活用し、自ら試行錯誤を

河野　学校運営の観点から、管理職は生成AIの利活用において、どのようなことを意識すればよいでしょうか。

高橋　まず、数値で測れる学力だけではなく、概念的理解や「学びに向かう力」、自校が教育目標として掲げる資質・能力を育むというビジョンや、先ほど説明した、学びの過程と深さを見取る評価観を教師間で共有することです。生成AIの利活用には試行錯誤が不可欠です。細かいルールで生成AIの利活用を管理するのではなく、教師がビジョンに基づいて創意工夫を発揮できるようにすることが大切です。

河野　授業観や評価観を転換していくために、どのようなアプローチが考えられますか。

高橋　職員室の風土づくりが鍵を握ると思います。具体的には、「あの場面で生徒にどのような声をかけたか」「授業づくりの何が難しかったか」といった、実践の工夫や悩みを教師間で語り合う場をつくることです。そのように、各自の実践を言語化して共有することは、教師が自分の指導のあり方を見直すきっかけになるでしょう。

河野　教師が学び合う文化が大切ということですね。その醸成に向けて管理職に求められることは何でしょうか。

高橋　管理職の先生方も生成AIを活用し、生成AIがどういうものなのかを感じていただきたいと思います。実は今、私の研究室の大学院生が、研究において生成AIを使いこなし、急速に成長しています。そのため、教員である私がこれまでと同様に学生を指導・支援していけるよう、必死に生成AIについて学び、情報収集やデータの整理、研究のアプローチ方法の比較検討など、様々な場面で生成AIを活用しています。一時、学生が教員の自分を超えていくことを考えると戸惑いましたが、今はそれが教育者としての最大の成果だと捉えています。管理職の先生方にも、自ら試行錯誤しながら学び続け、現場の先生方がそれぞれの強みや能力を発揮できる環境を整えていっていただきたいと思います。

図5　生成AIを活用して生徒の思考を深めさせる際の留意点

1. 思考を深める活動では、まずは生徒に考えを書かせてから生成AIを使わせる
2. 「身体・知覚による経験」と知識・情報を結びつける時間や、「他者との対話」を通じて知識・情報の理解を深める場を設ける
3. 生成AIを「応答型」として活用できるように生徒を支援する

※高橋先生への取材を基に編集部で作成。

次ページから3校の事例を紹介
教科指導や探究学習、進路指導において生徒の思考を深める生成AIの利活用のあり方や方法を、3校の事例を通じて考える。

事例1

入学直後に生成AIの使い方を学び、学校全体で情報教育を推進

山形県立酒田光陵高校

文部科学省の生成AIパイロット校とDXハイスクールの指定を受けている山形県立酒田光陵高校。山形県のICT教育先進校でもある同校では、生成AIを活用した、生徒の思考を深める学習環境づくりを、教科を問わず進めている。生徒が適切に生成AIを活用できるようになるための素地づくりや、教科における具体的な活用例について聞いた。

普通科、工業科、商業科、情報科の4つの大学科、7つの小学科を有する山形県立酒田光陵高校は、山形県のICT教育先進校として、学校全体で情報教育を推進している。その中心的役割を果たしている情報科主任の湯澤一（はじめ）先生は、「生徒が生成AIを十分に活用できるよう、学校を挙げてその指導を行っている」と説明する。

「生成AIの利用に対して学校が制限をかけても、生徒は様々な目的・場面で生成AIを利用します。そうであるならば、生成AIを適切に、上手に使いこなせるよう、学校は生徒を支援すべきだと考えています。また、アプリケーションやプログラムの作成、データ解析など、本校の多くの学びにおいて、生成AIが重要なツールとして登場します。生成AIの『使い方』を学ぶ授業の設計・改善は、情報教育の土台となるものです」

入学直後に生徒が受講するのが「生成AIモラル講座」だ。文部科学省の「初等中等教育段階における生成AIの利用に関するガイドライン」をベースに同校が作成した生成AI活用ガイドラインを使って、「生成AIの仕組み」「使用するメリットとデメリット」「適切な使い方」「簡単な活用方法」などを学ぶ。

2026年8月には、新しい取り組みとして、情報科の1・2年生を対象に、「人間と生成AIの役割分担」について考える授業に挑戦した（**図1**）。生徒は、イベントなどの受け付けにできる長蛇の列はどのようにすれば防げるかを、生成AIを使って短時間で考えるという課題に取り組んだ。生成AIをどのように使うかはあえて指示しなかったため、生成AIとのやり取りを繰り返して自分の考えを練り上げた生徒もいれば、生成AIの回答をそのまま自分の考えとした生徒もいた。

「回答後、生徒は『生成AIがしたことと自分がしたこと』といった複数の観点で自分の取り組みを振り返りました。同じ課題に同じ時間で取り組んだ生徒たちが互いの使い方を知る中で、『自分は考えることをすべて生成AIに丸投げしていた』『人間がうまくかかわれば、短い時間でよりよい回答を生成AIと一緒につくることができると思った』など、多くの気づきを得ていました」（湯澤先生）



教頭
小山大央
おやま・たかひろ
同校に赴任して1年目。



情報科主任
湯澤 一
ゆざわ・はじめ
同校に赴任して15年目。情報科。



1年次主任
寺﨑英之
てらさき・ひでゆき
同校に赴任して4年目。理科。



2年次担任
佐藤千穂
さとう・ちほ
同校に赴任して15年目。家庭科。

学校概要

設立 2012（平成24）年
形態 全日制／普通科、工業科、商業科、情報科／共学
生徒数 1学年約260人
2025年度卒業生進路実績 国公立大は、小樽商科大、山形大、公立千歳科学技術大、岩手県立大、東北公益文科大などに13人が合格。私立大は、東北学院大、東北芸術工科大、千葉工業大、専修大、神奈川工科大などに延べ48人が合格。短大・専門学校進学77人。就職118人。

生徒が生成AIに与えた指示や生成AIとのやり取りはすべて記録・収集し、生徒の現状の把握や課題の洗い出しに活用するとともに、それらを校内に共有している。

未知の世界を共創することで、生成AIがより身近な存在に

家庭科の佐藤千穂先生は、グループワークでの学びを活性化させることを目的に生成AIを活用している。例えば、高齢者とのかかわり方について考える単元では、認知症について学んだ後、高齢者とどのように接すればよいかを、ロールプレイの台本作りを通じて考える授業を行った（**図2**）。

「その単元では、高齢者や認知症の方とよりよい関係をつくるためのケア・コミュニケーションの技法である『ユマニチュード』について学びますが、それを単に個別の知識として習得するだけでなく、実生活でどのように活用できそうかを生徒たちに考えてもらいたいと思いました」

ロールプレイの台本を作る上では、認知症や介護の現場に関する知識だけでなく、高齢者と同居したり、認知症の方と接したりする経験があることが望ましい。そこで、そうした経験がない生徒でも、リアルな場面設定ができるよう、台本作りのサポートに生成AIを活用することにした。

「私が台本の例を提示してもよいのですが、生徒たちが生成AIの助けを借りながらも具体的な場面を設定すれば、『自分たちがつくり出した事例』という意識を持たせることができるのではないかと考えました。実際に見たことがない状況を自分たちの力だけで台本に書き起こそうとしたら、かなりの時間がかかったと思いますが、生成AIを使ったことでその時間は短縮され、その分、どのようなかかわりが高齢者や認知症の方の心の安寧につながるのかを考えることに時間をかけることができました」

授業を終えた生徒からは、「ユマニチュードという初めて知った技法を基に、自分たちで台本を考えるのは難しいと思っていたが、生成AIに手伝ってもらったおかげで、とてもリアルな台本ができた」といった声が上がった。

「生成AIが作った台本には、『実際のケアの現場は、そんなに都合はよくないはず』と疑問に思う部分も含まれていました。今回の単元で扱ったケアは、まさに答えが簡単には出せない、想定通りにはいかないものです。生成AIが提案した、実際にはありえない事例については、生徒に対して『本当にそういう状況は起こりそう?』などと、教師である私が様々な角度から問いかけることで、生徒の思考を深めていきたいと思っています」（佐藤先生）

生成AIが1人の生徒として授業に参画

理科を担当する寺崎英之（てらさきひでゆき）先生は、生徒間で学習の成果を評価し合う教育活動に生成AIを参画させることで、生徒の評価の視点を豊かにし、学習改善

図1 生成AIとの役割分担を考える「入場受け付け問題」

生成AIをよく活用して、次の課題に取り組み、作文を提出してください。

ある高校で、文化祭の入場受け付けに長い行列ができています。
A：2次元コードによる事前受け付け
B：受け付け窓口を増やす
C：時間帯別の入場制にする
あなたならどの方法を採用しますか。複数の方法を組み合わせたり、別の方法を提案したりしても構いません。採用する方法、その理由、考えられる問題点とその対策を含めて、300字程度で説明してください。

生徒は以下のような観点で自身の生成AIの活用を振り返り、生成AIとの役割分担を考える

- 生成AIに最初に与えたプロンプトは何か
- 生成AIを何に使ったか
- 生成AIがしたこと、自分がしたことは何か
- 生成AIを使って、自分の考えは変わったか
- 「生成AIをよく活用する」とは、どのように使うことか

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 ユマニチュードを素材とした朗読劇の台本制作

● **生成AIへのプロンプトの例**
あなたは有名なドラマの脚本家です。登場人物は3人です。今回は、高校生が学校からの帰り道で、徘徊する高齢者を見かけた場面の朗読劇を作ります。3分くらいの脚本を作成してください。高齢者は認知症です。ユマニチュードを意識してください。

生徒への注意 班の人数に合わせて登場人物の人数を設定してください。「学校からの帰り道で、徘徊している高齢者を見かけた」の部分は、「施設に入所している祖母に会いに行く」「セルフレジの操作に戸惑う高齢者を見かけた」などに変更してください。「認知症」の部分は、「片麻痺がある」「耳が聞こえにくい」などに変更してください。

※学校資料を基に編集部で作成。

へとつなげる授業に挑戦している。

例えば「科学と人間生活」では、乳脂肪の膜が破れて脂肪が残ることでバターができることを学んだ後、生徒に成分の異なる4つの製品を提示し、バターができる製品はどれかを考えさせた上で実験に取り組ませた。

「生徒は実験の前と後で考察を行い、ペアになった相手から考察に対する評価を受けました。評価は私が作成した評価規準に基づいて行いましたが、生徒同士だと評価が甘くなったり、規準に基づいた評価ができなかったりすることもあります。そこで評価の妥当性を検証する役割を生成AIに担わせることにしました（**図3**）」（寺﨑先生）

生成AIが評価するのは生徒の考察自体ではなく、考察に対する評価であることが取り組みのポイントであると寺﨑先生は説明する。評価の妥当性を生成AIが検証し、その理由を生徒に提示することで、評価規準に対する生徒の理解が深まり、その後に行う別の実験での考察がより深くなることが期待できるのだ。

生徒だけで互いの評価に対する気づきを話し合っていた頃は、評価規準を正確に読み取れていないことや、互いの評価に欠けている視点があることに気づかない生徒もいたが、生成AIが参画するようになってからは生徒の話し合いの質が向上したと寺﨑先生は語る。

「生徒同士の話し合いの中で、『論理的な根拠が足りない』『因果関係がないのではないか』といった言葉が聞かれるようになりました。生成AIはあくまでも評価規準に基づき、生徒に忖度することなく評価するからこそ、生徒が気づいていない視点を具体的に提示し、生徒もそれを受け止められているのだと思います」（寺﨑先生）

すべての教職員を取り残さない学校づくり

生成AIを活用した全校的な校務・授業改善の推進で重要な役割を果たしているのが、毎月1回、情報科が中心となって開催している「DXミーティング」だ。各教科から少なくとも1人が参加し、他校の視察内容や先進校の事例などを共有している。

「DXミーティングに限らず、職員会議などの場でも、ICTや生成AIの活用についての情報提供が教科・分掌を超えて行われています。また、教職員が利用するチャットでも、『こんな研修会に参加した』などと報告し合うことができています」（湯澤先生）

小山大央（おやまたかひろ）教頭は、情報科を中心とする校内体制と、教師一人ひとりの「とにかく一度やってみよう」という気風が、生成AIの全校的な活用を後押ししていると説明する。

「本校の教師の多くは、東北におけるICT教育をけん引するという自覚を持ち、それぞれの実践に取り組んでいます。ただ、4学科を擁する本校には100人を超える教職員が所属し、毎年度の異動で教師の入れ替わりもあるため、ICT教育に対する熱量は様々です。そのため、管理職として果たすべき役割の1つは、すべての教職員のICT教育に対する熱量を高める環境づくりだと考えています」

ICT活用に関する校内の現状把握も欠かせないと小山教頭は語る。26年度は、情報管理部が中心となって校内のICT活用の状況を調査。その結果を踏まえ、ICT活用がまだ十分に進んでいない教職員向けの研修を新たに年度内に開催することにした。

「新しい技術の活用が進めば、校務・授業の改善も進みます。しかし、それだけでよしとせず、先生方の負担感が増えていないかなど、校内の状況も注視しながら、新技術の活用を推進していきたいと考えています」（小山教頭）

図3　生成AIによる生徒の相互評価の妥当性の検証

生徒Xさんの考察

結果は、予測とは違い、C・Dがバターになって、A・Bはバターにならなかった。ただ、仮説は完全に外れているわけではないと思った。なぜなら、乳脂肪分が含まれる濃度が違ったからだ。（略）予想が外れたBは、C・Dと比べて平均すると30%ほど濃度が低かった。そのため、バターにするためには、乳脂肪分が入っているだけではなく、どのくらい入っているかが重要だと考えた。

生徒Yさんによる評価

A評価

仮説と結果を比べて、仮説のどこが合っていて、どこが間違っていたのかを明確にしていてよいと思った。数値を使って具体的に説明しているので分かりやすい。

生成AIによる評価

A評価

数値データ（事実）の活用という視点：「数値を使って具体的に説明している」という点から、単に「固まった」「固まらなかった」という主観的な記述ではなく、「乳脂肪分○％のものは○分で固まった」といった客観的なデータ（事実）が示されていることが分かります。

因果関係へのアプローチという視点：仮説である「植物油脂は常温で固まらない（さらさらしている）」「乳脂肪分があればバターになる」に対して、実際の結果がどうだったかを照らし合わせています。「なぜそうなったのか」というメカニズム（因果関係）に踏み込めているため、【B評価】の「傾向の記述」にとどまらず、【A評価】の「深い論述」に達していると推測できます。

※学校資料を基に編集部で作成。

事例2

「思考する喜び」を実感できるよう、生成AIを活用した授業改善に挑む

埼玉県立大宮高校

DXハイスクールの指定校である埼玉県立大宮高校では、授業を始めとする多様な場面での生成AIの活用が進んでいる。例えば、小説の要約や翻訳を比較する国語の授業や、探究学習の課題設定、また、志望理由をより自分らしいものとする過程で、生成AIを活用している。そうした教育活動を通じて、生徒が思考を深めている同校の実践を見ていく。

埼玉県立大宮高校の3年生のあるクラスで実施した調査（＊）では、生徒の約7割が家庭学習などの個人的な学習において生成AIを活用していることが分かった。そのように、生成AIは同校の生徒にとっては身近な学習ツールとなっているが、生徒が生成AIに頼り切ってしまっているという様子は今のところはないと、ICT推進部の清水崇文先生は語る。

「先日も休み時間に、生徒たちが『生成AIにすぐに問題の答えを聞くような使い方をしていたら、学力は身につかないよね』と話しているのを耳にしました。本校の生徒の多くは難関大学を目指していることもあり、自分の力で問題を解かなければ意味がないことをよく理解しているのだと思います」

教科書を理解しただけでは答えにたどり着くのが難しい問題において、解決の糸口に気づくきっかけとなるような問いを投げかけてもらうツールとして生成AIを使っている生徒が多いようだと、清水先生は説明する。

同校の教師は、生徒が一層思考を深め、考えたことを表現するための生成AIの活用方法を、実践を通じて追究している。その1つが、国語科の横山大基先生が実践する、生成AIの回答を自分の考えと比べさせる授業だ。横山先生は、生成AIを学習ツールとして使用する際の懸念点として、生成AIの回答を生徒が無批判に受け入れてしまい、思考を深めたり、自分が考えたことを表現したりする機会を失ってしまうことを挙げる。

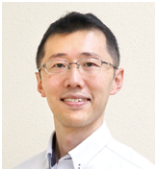
「生成AIは、文章にしても、画像にしても、誰もが納得しそうなものを作成するのが得意です。そこで、あえて生成AIに不十分な回答を作成させ、その回答を自分の視点で読み直し、『自分ならどうか』を考える授業に挑戦しています」

人間と生成AIの要約などを比較。人間ならではの着眼点に気づく

1年次の「現代の国語」では、芥川龍之介の『羅生門』の要約比較を行った。『羅生門』は多くの国語の教科書に掲載されているが、横山先生は、指導書に載っている本文の要約の要旨が教科書会社によって異なる点に着目。複数の教科書会社の要約、そして生成AIによる要約を比較し、それらの違



校長
松中直司
まつなか・ただし
同校に赴任して3年目。



理数科推進部主任
小林建仁
こばやし・けんじ
同校に赴任して10年目。
理科（化学）。



ICT推進部
清水崇文
しみず・たかふみ
同校に赴任して11年目。
理科（物理）。



教務部
横山大基
よこやま・だいき
同校に赴任して8年目。
国語科。

学校概要

設立 1927（昭和2）年
形態 全日制／普通科・理数科／共学
生徒数 1学年約360人
2025年度卒業生進路実績 国公立大は、東北大、筑波大、埼玉大、千葉大、お茶の水女子大、東京外国語大、東京科学大、東京学芸大、東京大、東京農工大、一橋大、横浜国立大、京都大、東京都立大などに163人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ1019人が合格。

＊ 横山大基先生が3年生に実施したアンケート調査の結果。

いを生徒に考えさせた（**図1**）。

「教科書会社の要約は人物や場面など、着目している点があり、それが教科書会社によって異なります。一方、生成AIに回答字数だけを指示して要約させると、事実をただ羅列するなど、機械的な要約が出力されます。教科書会社の要約に比べると、『この作品を通して、何を考えてもらいたいか』といった、生徒に着目してほしい点が明確ではないのです。そこで生徒には、教科書会社と生成AIの機械的な要約を比較してから、『自分なら、この作品の何を重視して要約するか』を考えてもらいました」（横山先生）

2年次には「フランケンシュタイン」を題材に、アメリカの短編小説を日本の作家が翻訳したものと、生成AIに作品の背景などの情報を与えずに翻訳させたものとを比較し、「自分なら、この小説の何を大切にして翻訳するか」を考えた上で、生徒が自分で翻訳をしてみる授業を行った（**図1**）。

「どちらの授業でも、生徒は『自分ならどうするか』を深く考えることができたと思います。例えば2年生の授業では、『登場人物の一人称に「私」「僕」「俺」のどれを選ぶのか、作品をじっくりと鑑賞しながら自分なりの結論を出した』『一番伝えたいであろう言葉を、倒置法を使って強調した』など、生徒は自分なりのこだわりを追求していました」（横山先生）

図1　国語科における生成AIの活用例

■小説要約比較（1年生）

教科書会社A	×	教科書会社B	×	生成AI
「人物描写」に着目した要約		「場面描写」に着目した要約		（詳細プロンプトなし）フラットな要約

教科書会社A、B、生成AIによる3つの要約の共通点、相違点を確認し、自分なら何を重視して要約するかを生徒に考えさせた

■翻訳実践（2年生）

作家による訳	×	生成AI訳	×	作家の翻訳論
こだわりの翻訳		（詳細プロンプトなし）フラットな翻訳		こだわりの見取り方

with 生成AI　生徒自身がこだわりのある翻訳をつくる

作家による翻訳、生成AIによる翻訳、そして作家の翻訳論を読んだ後、生徒がこだわりのある翻訳に挑戦した

※学校資料を基に編集部で作成。

探究における課題の設定の壁打ち相手として活用

同校では26年度、1年次の総合的な探究の時間において生成AIを試行的に活用した。総合的な探究の時間の企画・運営を担当する清水先生は、自身が精選した文献を学習させた生成AIを、探究課題をブラッシュアップしていく際の壁打ちの相手として生徒に活用させたと説明する。

「1年次は、生徒はグループになった上で、経済やエネルギー、スポーツ、環境などのカテゴリーから、自分たちの興味のあるものを選び、その中で探究する課題を設定します。そこで私は、各カテゴリーに関する文献を生成AIに学習させ、各カテゴリーの概況を生徒に提示しました。そして各グループで、『なぜ、現状のようになったのか』『どのような問題が起きているのか』などと生成AIに質問しながら、探究する課題を考えていきました。多くのグループが生成AIとの対話によって、社会の現状や自分たちの興味・関心をより深掘りしてから課題を設定できたと思います」

そのように、生成AIが言わばメンターとなり、話し合いが活性化したグループもあった一方で、生成AIにどのような質問をすればよいかが分からず、話し合いが停滞したグループもあったと、清水先生は振り返る。

「生成AIへの質問例をある程度提示しましたが、もっといろいろな質問例を系統立てて紹介してもよかったのかもしれません。また、今回は1年生ということもあり、私が信頼できると判断した文献を学習させた生成AIを利用しましたが、ファクトチェックの工程の大切さを指導した上で、インターネット上から広く情報を検索して回答する生成AIを利用して、必要な情報を生徒に取捨選択させることもできるでしょう。自校の探究学習をどのようなものにしたいかによって、生成AIの活用のあり方は変わってきます」

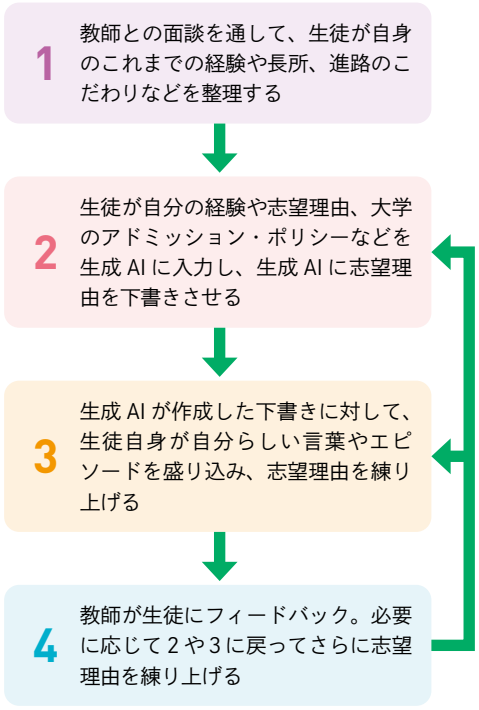
清水先生は、探究学習における生成AIの活用の成果だけでなく、課題も含めて校内で共有することで、各教科

における生成AIの活用のあり方を考える材料が蓄積されると考えている。

「思考を深める授業」の実現は学校全体の課題

理数科推進部主任の小林建仁（けんじ）先生は26年度から、総合型選抜や学校推薦型選抜の志望理由書の作成において生成AIを活用している。ただ、最初からは生成AIは利活用しない。まずは生徒と面談し、志望理由や将来の目標、高校生活での重要な経験などを確認する。その上で生徒は、それらに加えて志望大学・学部のアドミッション・ポリシーなどを箇条書きにして生成AIに入力し、志望理由書の下書きを作成させる（**図2**）。

図2 生成AIを活用した志望理由書作成の伴走



志望理由の作成に生成AIを活用することで、教師は生徒の思いや経験を生徒と一緒に整理する時間を増やすことができた。

※学校資料を基に編集部で作成。

「生成AIが作成した下書きは、その生徒らしい言葉で書かれていなかったり、生徒が伝えたい思いや経験が十分に反映されていなかったりするため、生徒は違和感を覚えます。そこで生徒に、その違和感の原因を探らせ、自分の言葉で書き直させたり、エピソードなどを差し替えさせたりします。つまり、生成AIの下書きは、生徒が自分自身に深く向き合う手がかりとして活用させているのです。そうして生徒は生成AIとのやり取りを何度か繰り返し、志望理由をある程度練り上げた段階で再び私と面談し、さらに生徒にフィードバックを行っています」

総合型選抜や学校推薦型選抜の志願者が増え、出願指導などで担任への負担が大きくなる中、伴走の初期段階から生成AIの力を借りようという考えも小林先生にはあった。生成AIを活用したことで、生徒が志望理由書の下書きを仕上げるまでの時間が圧縮されることを、小林先生も実感している。

ただ、生徒が自分の思いや経験を俯瞰したり、志望理由が説得力のあるものになっているかを検証したりする上では、その生徒のことをよく知る担任などとの面談が最も重要であることは変わらないと、小林先生は語る。

「生徒との面談で『君はこんなに素晴らしい経験をしているんだね』『この経験で得た気づきは、君が思っている以上に深いものだと思うよ』などと、生徒の過去や現在を未来に結びつける支援ができるのは、その生徒のことをよく知る教師です。生徒が志望理由書の下書きを仕上げるまでの時間が圧縮された分、生徒の思いや経験を一緒に整理したり、生徒の言葉に『なぜ？』と問いかけたりする時間を以前よりも増やすことができています」（小林先生）

生成AIを活用した教科の授業や探究、進路指導での実践例の蓄積に力を入れている大宮高校。教師は、生成AIに学びが奪われることのない、これからの授業のあり方について日々話し合っているが、そうした中で「生徒が学校でクラスメートと取り組みたいと思える課題のあり方」に大きな関心が集まっていると、横山先生は語る。

「生成AIだけで学びが完結しかねないこれからの社会では、学校という場で学ぶ意義や喜びを生徒にこれまで以上に感じさせることが、私たち教師に求められているのではないでしょうか。膨大な情報や、もっともらしい答えが超高速で手に入る時代だからこそ、限られた人生の中での出会いや気づきの価値を自覚できる生徒を育てたいと思っています」（横山先生）

生成AIを活用するこれからの学びのあり方は、管理職がリードして校内で活発に議論し続けるべき重要な課題だと、松中直司（ただし）校長は語る。

「生成AIが存在しない時代に学校で学んだ私たち教師は、思考することの喜び、大切さが骨身に染みています。しかし、これからの生徒は、思考する機会を生成AIにどんどん奪われる可能性があり、『そもそも思考とは何か、なぜ、それが大切なのか、どのようにして自分の中に思考する力を育んでいくのか』といったことを、生徒に理解させなければいけない時代が来るかもしれません。だからこそ、教師がそうした状況に問題意識を持ち、新しい授業実践に挑戦できるよう、生成AIを活用する学びをテーマとする校内研修などを、管理職が積極的に支援していかなければいけないと思っています」

事例3

生成AIが生徒の学びに適切な負荷をかけ、教科学習・探究学習を深める

滋賀県・私立立命館守山中学校・高校

ICT環境を整備し、その積極的な活用を通じてグローバル教育や探究学習を推進してきた滋賀県・私立立命館守山中学校・高校。生成AIの登場は同校の学びのあり方にもさらなる変革をもたらしている。英語科の授業、そして探究に取り組む独自教科「共創探究科」における生成AIの活用について聞いた。

滋賀県・私立立命館守山中学校・高校は、文部科学省「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業（AIの活用による英語教育強化事業）」の採択校として、英語教育における生成AIの活用について、実践を通じた研究に取り組んでいる。2026年1月には同事業の一環として、生徒の声を基に生成AIの活用法と失敗事例をまとめた「高校生のためのAI活用事例ハンドブック」（＊）を公開。同書においては、生成AIを活用する上で大切にすべき方針を、「新しい技術に考えることを奪われ、使われる人になるのではなく、使いこなす人を育てる」とし、現場のリアルな課題と可能性を提示した。

英語科における具体的な活用方法の1つは、英文で取り扱われているトピックに関する知識をインプットしてくれる相手としての活用だ。単元の冒頭などで生成AIが行うトピックに関する説明に対して、生徒が英語や日本語で質問することで、トピックに対する期待感を高め、読解に必要な基礎知識を得られるようにしている。

生徒が自分の考えをアウトプットする相手としても生成AIを活用している。具体的には、教師が作成した評価項目を生成AIに事前学習させ、「生徒が自分の力で英文を作成するよう、改善点のみを指摘する」といった設定がされている生成AIに、生徒が話したり、書いたりした内容に対して改善点を指摘させている。生成AIが指摘した内容は教師も端末で確認し、重要な内容はクラス全体に共有する。

生成AIをインプット・アウトプットの相手として活用するようになって以降、ペアワークやグループワークでやり取りする内容が深まったと、入試広報部主任でAI活用リーダー代表の山内優馬先生は説明する。

「生徒間でのやり取りには他者から学べるよさがありますが、トピックが難しくなると、間違いを恐れてやり取りが停滞することもあります。しかし、生成AIが相手であれば、間違えることへの恐れが少なくなります。生成AIと活発にやり取りする中で、様々な表現に触れながら自分の考えを練り上げ、話すことに自信を持った状態で、その後のペアワークやグループワークに取り組むことができています」

また、生徒が生成AIに英語を教えることを通じて生徒の思考力や英語力を高めるプロジェクトである「育てるAI」に、立命館大学と共同で取り組んでいる。英語が苦手な学習者という役割が与えられた生成AIに、生徒は協働して文法知識を教える（**図1**）。



入試広報部主任・AI活用リーダー代表
山内優馬
やまうち・ゆうま
同校に赴任して11年目。英語科。



国際部主任
吉本恵子
よしもと・けいこ
同校に赴任して19年目。英語科。



グローバルコース主任・共創探究科主任
田辺記子
たなべ・のりこ
同校に赴任して18年目。地理歴史・公民科。

学校概要

設立 2006（平成18）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約320人
2025年度卒業生進路実績 国公立大は、東北大、埼玉大、東京農工大、富山大、名古屋大、滋賀医科大、京都工芸繊維大、大阪教育大、鳥取大、名古屋市立大、大阪公立大などに16人が合格。立命館大、立命館アジア太平洋大に内部進学283人。他の私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ60人が合格。

＊ 成功事例だけでなく、高校生が簡単に陥ってしまうようなよくない使い方事例もまとめている。同校のウェブサイトで公開されている。

「特定の文法知識がない生成AIが、その文法問題に正解できるようになることを目指し、生徒はグループで生成AIに文法知識を教えます。生徒の説明が不十分だと『育てるAI』は『もう少し詳しく教えてください』と、正解に必要な事項の説明を生徒に求めてきます」(山内先生)

「育てるAI」を活用することで、文法が苦手な生徒も、その学習に前向きに取り組めるようになった。また、生徒間で文法事項を教え合うと、間違った理解のまま学習を進めてしまうことがこれまではあったが、「育てるAI」は正しい知識を生徒に求め続けるため、生徒が間違った理解のまま学習を進めていくことも少なくなった。「育てるAI」の取り組みに熱心だった生徒は、ベネッセが提供する「GTEC」においてスコアの向上が顕著に見られたという。

英語科内では生成AIの活用のメリットとともに、指導上の留意点も随時共有していると、国際部主任の吉本恵子先生は語る。

「例えば、中学校段階では、英単語や英文を筆記する機会を保障するため、紙のノートを使用することを基本とし、指導の要所でアナログな方法も取り入れています。また、英作文や発表スライドなどについては、製作物だけを評価するのではなく、生徒に内容に関する質問や自分の意見を問うインタビューテストを実施することで、実際の生徒の言語運用力を把握することを英語科では大切にしています」

生成AIの登場で英文和訳や英作文などが簡単にできるようになっているからこそ、生徒が英語を自分の力で運用する場面を確実につくっていくことが求められると、吉本先生は指摘する。

「重要なのは、学力向上に結びつくような、生徒に適切な負荷がかかる学びが実現できているかどうかだと思います。今後も英語科では、各教師の実践を共有しながら、よりよい指導方法を追求していきたいと考えています」

生徒の探究学習をいつでも支えてくれる生成AIボットを開発

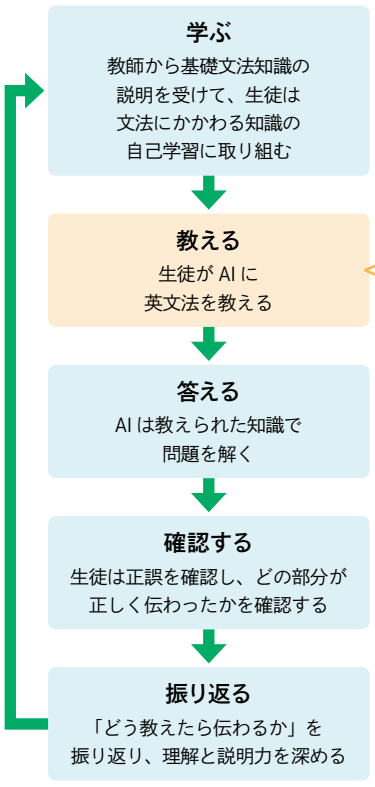
同校の独自教科「共創探究科」を担当する田辺記子(たなべのりこ)先生は、探究学習における生徒の伴走役としての生成AIの活用を研究している。同研究は、探究学習で生まれた生徒の疑問や悩みに、教師は必ずしも生徒の希望するタイミングで対応できるとは限らないという問題意識から始まった。

「例えば、自分の好きな『食べること』を起点に探究する課題を設定しようと考えている生徒がいるとします。フードロスや貧困といった社会問題はすぐに思い浮かんでも、自分の得意なことや進路の目標などと結びつけながら、その問題を自分事化し、解決に貢献できるようなアクションを見いだすことは容易ではありません。そのため、教師との対話で深堀りすることが重要になるわけですが、生徒が希望するタイミングで教師が必ず対話することができるかというと、それは物理的に難しいのです」

そこで自分の探究が停滞することを嫌い、教師の代わりに生成AIに相談する生徒も少なくないが、生成AIから得られるアドバイスは安易なものが多いと、田辺先生は語る。

「例えば、フードロスを解決するアクションとして啓発ポスターの作成を

図1 生徒が生成AIに英文法を教える「育てるAI」



■生徒が生成AIに教えた内容例

関係副詞「how」は、方法を表す副詞です。副詞は動詞を修飾します。動詞を修飾するとは、動詞の意味をより詳しく説明したり、限定したりすることを指します。具体的には、動詞の動作や状態がどのように行われるか、どの程度行われるか、いつ行われるかなどを表す言葉をつけることです。

先行詞は「the way (方法)」ですが、「how 」または「the way」単体で使うことが多いのが特徴です(「the way how」のような使い方は一般的にしない)。これは、「the way」と「how」どちらも方法や手順を表す単語であり、重複して用いる必要がないからです。

以下の文章を見てみましょう。

I like how she sings.
I like the way she sings .
彼女の歌い方が好きです。

上記のように「how」もしくは「the way」だけで成り立ちます。

(例文)

I don't know how he built this house by himself.
どのように彼がこの家を自分で建てたのかは知りません。
I like the way he thinks.
彼の考え方が好きです。
I'm not sure how that way works.
その方法がどのように機能するのかは定かではありません。
I think that the way he acts is a bit childish.

This is the way I do.
これが私のやり方です。

※学校資料を基に編集部で作成。

思いついた生徒が生成ＡＩに相談すると、生成ＡＩは『それはよい解決策ですね』などと肯定的に評価します。しかし、本来は生徒に対して『その方法でどのくらい問題が解決すると思う？』『自己満足にとどまっていない？』といった声かけが必要です。そこで、探究学習において生徒をよりよく悩ませ、生徒をいつでも支えてくれる生成ＡＩボットを私たち教師でつくろうと決意しました」（田辺先生）

図2　探究学習における教師ペルソナ型生成AI「たなべボット」

「転生ものの小説やアニメが好きです。みんなも興味があるのなら、転生もののストーリーを誰かの問題、社会問題の解決に役立てられないかと思いつきましたが、アイデアが浮かびません」



一般的な生成 AI の回答（要旨）

❶**キャリア・進路支援：「人生 2 周目」思考の活用**

- **テーマ案**「転生小説の『強くてニューゲーム』構造を応用したキャリアシミュレーションプログラムの開発」
- **解決のアプローチ**

「もし今の知識のまま中学生（あるいは小学校低学年）に戻ったら、どんな選択をするか？」を具体的に書き出すワークショップを作成・実施。客観的に自分の過去を振り返ることで、現在の自分の強みや「本当にやりたかったこと」を再発見できる教育ツールとして提案。

❷**高齢者・認知症支援：回想法と「異世界転生」**

- **テーマ案**「高齢者の人生経験を異世界知識として捉え直す『回想型コミュニケーション』の提案」
- **解決のアプローチ**

高齢者が持つ昭和・平成の知恵や職人技術は、デジタル化された現代や若い世代にとっては「異世界のチート知識」と同等です。高校生が高齢者に「昔の暮らしや工夫」をインタビューし、それを「異世界転生風の物語」に再構成してプレゼントする、あるいは地域で共有する取り組みを企画します。高齢者の生きがい創出や世代間交流につながります。

※このほか、「転生作品の構造を活用した、地元の隠れた資源の再掘り起こし」「転生ブームの背景分析と、現実社会における『自己再定義（Re:Start）』手法の考察」などを提案。



たなべボットの回答

▶転生アニメ・小説の流行を社会問題の解決に応用したいが、具体案が出ず停滞中。

▶指摘メモ：目的（社会問題の解決）に対して「転生もの」という手段のスケールが大きく、具体化のステップが踏めていません。視点を「読者（相手）」に切り替えましょう。

▶「転生」の本質は「今の知識を持ったまま、別の環境でやり直すこと（疑似体験）」です。社会問題の解決に使うなら、課題当事者の立場を疑似体験させるエンタメ作品を作るか、既存の課題を異世界に見立てるアプローチが有効です。まずはターゲットと課題を絞り込む必要があります。

▶ Next Action

- 解決したい「社会問題」の候補を 3 つ 挙げる（例：食品ロス、高齢者の孤立、地域の観光衰退など）
- 上記の候補を、本日 20:00 まで にこのチャットに送信する

※学校資料を基に編集部で作成。

答えがすぐ手に入る時代だからこそ、生徒に考えさせ続ける

田辺先生は25年4～10月に、田辺先生と生徒との探究学習に関する対話を、生徒に許可を得た上で録音。10時間以上の対話の記録を、「共創探究科」担当の同僚の教師が生成ＡＩに分析させた。その結果、田辺先生の生徒への向き合い方には、「目的と手段のズレを率直に指摘する」「状況に合わせた具体的な解決策を提案する」といった特徴があることが分かった。そうした特徴を学習させた、生徒の相談に回答する教師ペルソナ型生成ＡＩ「たなべボット」を開発。校内研修会を経て、26年4月から、課題の設定の伴走役として試験的に運用を開始した。7月までの約3か月で8割近くの生徒が活用した。

条件を設けなければ生成ＡＩはすぐに答えを提示するため、生徒は自分で思考を深める機会を失ってしまう。しかし「たなべボット」は、「あなたの言っていることは、こういうことですよね」などと生徒の話を受け止めながら、「この部分が足りません」「解決したい問題を明確にしましょう」などと、生徒が考えるべきことを、いつまでに考えるべきかといった期限とともに提示する（**図2**）。

「たなべボット」を使った生徒からは、「場所や時間を選ばずに相談できてよかった」「先生との対話の時間が来るのを待っている間に『たなべボット』を使ったら、課題の設定が少し進んだ」「自分が何にモヤモヤしているのかを『たなべボット』が言語化してくれて、次に何をすればよいのかが明確になった」といった声が上がった。一方で、「たなべボット」にはない田辺先生のよさとして、「厳しい指摘であっても生徒が受け止められるように、明るい表情でそれを伝えてくれるところ」「生徒の性格やこれまでの経験などを踏まえて相談に応えてくれるところ」「田辺先生のネットワークによる人や機関の紹介を通じて、生徒の興味・関心と社会を接続しようとしてくれるところ」などを挙げた。

そうした生徒の声から、「生成ＡＩ時代における教師の役割」がより明確に見えてきたと田辺先生は語る。

「『こうするといいよ』と答えを与えた方が、教師は手間がかからないですし、生徒も楽だと思いますが、それでは生徒の思考は深まりません。生成ＡＩからすぐに答えが手に入る時代だからこそ、手間をいとわずに生徒に考えさせる働きかけを続けることが教師に求められているのだと思います。そしてそれは、生徒も求めていることなのではないでしょうか」

本特集を振り返って

生成AIを学びのパートナーとし、人生のオーナーシップを育む

生成AIが人間に代わって自律的に思考・判断し、知能全般で人間を凌駕する日が近いと言われる今、人間が思考することの意味とは何か。国立教育政策研究所初等中等教育研究部部長で、同・教育データサイエンスセンター副センター長を務める白水始氏と、VIEWnext編集部統括責任者の柏木崇が、生成AI時代における思考の意味と人間が果たすべき役割、そして次代を生きる生徒を育てる学校に求められることについて語り合った。

生成AIの答えの価値を判断することが人間の役割

柏木　2022年の対話型生成AI「ChatGPT」の一般公開以降、生成AIは驚異的な速度で進化を続けています。自らの誤りを検証・修正し、推論する能力を備えるまでになり、現在はユーザーが設定したゴールに対し、生成AI自身が計画を立て、複雑な工程を自律的にこなすAIエージェントが身近なものになりつつあります。膨大なデータの処理、プログラムの生成などの様々な領域で既に人間を凌駕し、生成AIが知能全般で人間を超える日が近く訪れると言われる今、人間が思考すること、学ぶことの意義・価値が問われているように思います。

白水　生成AIの能力が指数関数的に向上する中で、人間が思考する意義・価値とは何か、これからも人間には思考することが求められるのだろうかといった疑問を持つことはもっともだと思います。確かに、人間が社会を維持していくための思考の多くを生成AIに委ねることができる時代がもうすぐやって来るかもしれませんが、だからといって、人間が思考することを放棄してよいということにはなりません。生成AIという技術を作り出した私たち人間には、生成AIをどのように使うかを考え続ける責任があるからです。

柏木　26年10月、中央教育審議会の教育課程部会が「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」を公表しました。その中では、AI時代において人間が知識を持ち、思考する意義を整理しています（P. 22図1）。それは、「AIを駆動させるための指示や問いを出す必要性」「情報の正誤や妥当性を見極める必要性」「AIの基本的な仕組みや人間の認知に与える影響を理解した上で社会の創り手としての責任を果たす必要性」、そして「責任を持ってAIを制御したり、管理したり、発展させたりする必要性」の4点です。

白水　どれだけ生成AIが優れたものになったとしても、どんな社会を創りたいのか、そのためにどのように生成AIを管理するのかは、人間が思考すべきことです。近い将来、生成AIは事実とは異なる情報をもっともらしく出力してしまう「ハルシネーション」を起こさなくなるかもしれません。し



VIEWnext 編集部 統括責任者
柏木 崇



国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 部長 教育データサイエンスセンター 副センター長
白水 始（しろうず はじめ）

かし、生成AIが出力した結果が正解だったとしても、その正解に価値があるかどうか、つまり、生成AIが出した答えが人間の発想を豊かに広げる創造的なものかどうかを思考する責務が私たちにはあります。

より価値が高まる主体的・対話的で深い学び

柏木　生成AIが出力した結果に対する人間のかかわりが、正誤の識別から質の判断に変わってきているという指摘は、次代を生きる生徒たちに求められる資質・能力や、その育成のための授業のあり方を考える上での大切なヒントになると思います。

白水　歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリは、人間社会は判断を間違えることを前提とした集団であり、判断を間違える度に自ら修正し、前進してきたと、著書の中で語っています。事実、人類は宗教的世界観から科学的世界観へと転換して以来、特に民主主義社会において、集団としての目標を共有した上で、仮説を立て、間違いに気づいたら修正し、成果を得たらまた新しい目標を掲げることを協働的に繰り返してきました。そうした営みはまさに「主体的・対話的で深い学び」に取り組む姿そのものだと思います。

　私は東京大学名誉教授の故・三宅なほみ先生が開発した協調学習「知識構成型ジグソー法」の研究に努めてきました。協調学習では、対峙した問題に対して自分の答えを持つこと、ただし、自分の考えだけでは視野が狭くなるため、他者と対話しながら広く深く考えて答えを持つことを生徒に求めます。科学的で民主的な世界観の下、社会を発展させていこうとする限り、協調学習で育まれる「自分の考えをつくり、壊し、つくり直す力」は今後も必要ですし、生成AIが出した答えの質を判断するこれからの社会では、より重要になると思います。

柏木　生成AIをどのように使うのか、そして生成AIが出した答えに価値があるかを考えるためには、多様な他者と協働する力が欠かせないということですね。では、既に生徒・教師にとって身近な存在となっている生成AIをどのように活用すれば、他者と協働して思考する学びを充実させることができるでしょうか。

白水　学びにおける生成AIの活用には3つの段階があります。第1段階は、学習者が独力で解決が困難な問題について、ヒントやガイドを得るためのツールとしての活用です。第2段階は、対話を通じてともに考え、学びを創り出すファシリテーターとしての活用です。そして第3段階は、学習者が考えたことについて、異なる視点を提供することで思考を深めてくれるパートナーとしての活用です。学習者が「答えは出たけれども、この学びはまだ終わっていないのではないか」「新たにこのテーマについて考えたい」などと学びを広げ、深めていくための支援を生成AIが行います。

柏木　山形県立酒田光陵高校の理科の事例（**P.13〜14**）では、実験の考察に対する生徒の相互評価に生成AIが参画し、生徒たちに欠けがちな視点を提供していました。それはまさに第3段階の活用だと思います。

白水　生成AIは生徒にとって「常に正しい答えを知っている存在」ではなくてもよいと思います。私は15年ほど前、故・三宅なほみ先生とともに、「人とロボットの共生による協創社会」の実現を考える「人ロボット共生学」に取り組みました。その中で、学び合うパートナーとして人間が遠隔操作するロボットを協調学習に参画させたところ、ロボットが「君から話して」「話し合いをまとめるとこうなるね」などと正解を知る権威者として振る舞うよりも、「よく分からないからもう一度説明して」などと頼りにならない存在として振る舞う方が、ほかの学習者の学びの意欲を高め、学びが深まることが分かりました。生成AIを「いつも頼りになるとは限らない存在」とすることも、生成AIを活用する際の要点の1つだと私は考えてます。

柏木　埼玉県立大宮高校の国語科の事例（**P.15〜16**）や滋賀県・私立立命館守山中学校・高校の英語科の事例（**P.18〜**

図1　AI時代に人間が知識を持ち、思考する意義

AIへの指示や問い	AIを駆動させたり、「壁打ち」の相手にしたりするためには、人間側が該当する分野における一定の知識を持って適切な指示や問いを出す必要がある
情報の正誤や妥当性の見極め	AIが処理した膨大な情報の正誤や妥当性を判断し、責任を持って意思決定を行うための基盤としての知識が必要
社会の創り手としての責任	AIの基本的な仕組みや人間の認知に与える影響（情報の偏りなど）を理解し、民主的で持続可能な社会の創り手としての責任を果たす必要がある
生成AIの制御・管理・発展	人間が責任を持ってAIを制御したり、管理したり、発展させたりする必要がある

※中央教育審議会初等中等教育分科会 教育課程部会「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」を基に編集部で作成。

19）では、生徒に完璧な正解を教えてくれない存在、生徒が知識を与えないと駆動しない存在として生成AIを活用し、生徒の学びを深めていました。まさに「いつも頼りになるとは限らない存在」としての生成AIの活用です。

教師が自分の思考が深まった過程を生徒に見せる

柏木　既に生徒の多くが生成AIをツールとして日々の学習に活用しています。生徒が「答えを聞くだけのツールとして生成AIを活用するのならば、学びは深まらない」と理解し、思考を深めるためのツールとして活用できるようになるためには、教師にはどのような指導・支援が求められるでしょうか。

白水　生成AIを使って学びが深まった経験を、教師が生徒にオープンにすることが有効だと思います。「私はプリントを作る時に、こんなふうに生成AIと壁打ちをした」「ここまでは自分で気づけたけれども、生成AIの力を借りることで、この部分の視点が広がった」などと、教師の実体験を生徒に伝えることは、生成AIとともに生きる学び手、創り手としてのモデルになります。

柏木　「使い方を教える」のではなく、「使っている姿を見せる」のですね。そのように考えると、教師自身に「生成AIをこう使ったところ、思考が深まった」などと自覚できるような経験が欠かせませんし、さらにそれが、複数の教師たちの協働に生成AIが参画したエピソードであるのならば、生徒にとって教師はよりよい協調学習のロールモデルになると思いました。



しろうず・はじめ◎中京大学情報科学部講師、国立教育政策研究所総括研究官、東京大学大学発教育支援コンソーシアム推進機構機構長、同大学高大接続研究開発センター教授等を経て現職。専門は学習科学・認知科学。主な著書に『資質・能力［理論編］』『対話力―仲間との対話から学ぶ授業をデザインする！』（いずれも東洋館出版社）。

白水　学校は社会にとっての希望の場所であることが、生成AIの登場によってますます鮮明になったと私は考えています。企業では効率が求められますが、学校には、手間暇がかかる面倒なことでも、後で役に立つと考えられるのならば、それを大切にするという行動原理があります。そもそも学校は、生徒にとっては面倒なことばかりです。生成AIは自分の話をよく理解してくれるけれども、友人や先生にはなかなか自分の考えや思いが伝わらない。生成AIは小さな成果に対してもたくさん褒めてくれるけれども、友人や先生は褒めるばかりではなく、耳に痛いことも口にする。人間同士がつき合うこと、他者との対話を通して自分の考えを変えることは、とても面倒なことです。しかし、そうした面倒を乗り越えた先に、自分の思考が広がり、深まる喜びがある。そのことを生徒が体験を通して知る機会をつくることが、これまでと同様に学校が大事にしていくべきことだと私は思います。

柏木　生成AIの登場で授業のあり方や生徒の学び方が大きく変わろうとしていますが、学校という場の使命は変わるものではないということですね。

白水　人はそれぞれ顔が違うように、考え方も一人ひとり違います。それが個性、生き方です。個性や生き方は、学校で学び、自分なりに考え、さらに他者との対話を通して考えを広げたり、深めたりする中で形成されます。学校での学びは、教科書の内容を頭に入れるためだけにあるのではなく、自己形成のためにあるのです。そして高校は、生徒が学びを通して「自分はこんなふうに物事を考えるんだな」「私はこんな人生を歩んでいきたい」などと自己の生き方・あり方を理解しながら、自分をつくり上げる場なのだと思います。生成AIを活用した学びの中で自分らしさを形成し、様々な判断と選択を重ねてきた人生は紛れもなく自分のものだと思える「オーナーシップ」を生徒に育んでほしいと思います。

柏木　オーナーシップは、次期学習指導要領で育成を目指す「自分の人生を舵取りする力」の土台にあたるものだと思います。生成AI時代においては、自己の生き方・あり方を学びの中で確立していく助けとして生成AIを活用するという視点が、教師、生徒双方に必要だと思います。そして、学びを通してオーナーシップが育まれたのならば、次はそれぞれの人生の目標を達成するために主体的に生成AIを使いこなし、さらにオーナーシップを発揮して人生を豊かにしていく。そのような循環が生徒の内面で実現される学校が今後一層求められるのだと思いました。

学校の特色化・魅力化
探究学習・教科指導・進路指導の全方位で自校独自の価値をつくる
静岡県・静岡市立清水桜が丘高校

1分で分かる軌跡

2013年度に2校が統合して開校した静岡県・静岡市立清水桜が丘高校は、独自の価値創出に向け、23年度に改革に着手した。総合的な探究の時間では普通科・商業科の混合チームで探究学習を実施し、定期考査は廃止して単元テストを導入。生徒が将来への目的意識を持てるよう、進路指導も見直した。統合校ゆえに合意形成の面で難航することもあったが、教師間での対話を通じて「ともによい学校をつくる」という意識が醸成され、新たな挑戦がしやすい学校文化が育まれつつある。

＃普通科・商業科の併設　＃探究学習の改善　＃定期考査の廃止　＃単元テストの導入

変革の背景

少子化の中、選ばれる学校づくりが急務に

静岡県・静岡市立清水桜が丘高校は2013年度、静岡市立清水商業高校と静岡県立庵原高校が統合して開校した。普通科と商業科を併設する同校に入学してくる生徒の興味・関心や希望進路、学力は実に多様だが、2校が培ってきた歴史や文化を土台に、そうした生徒の多様性を踏まえながら、地域に根差した教育活動を展開してきた。しかし、同校を取り巻く地域においても少子化が進行。受験生から選ばれ続ける高校となるためには、同校独自の価値創出が急務となっていた。

その課題を重要視した静岡市教育委員会（以下、市教委）が23年度に「特色化・魅力化検討委員会」（以下、検討委員会）を設置。市教委と外部の有識者、同校の有志の教師が委員となり、市立高校として静岡の未来を創る担い手を育成するために同校はどうあるべきか、議論を重ねた。その結果、地域と連携して取り組む探究学習の深化や、自律した学習者の育成に向けた個別最適な学びの実現など、改革の方向性が示された。そしてその方向性を踏まえたスクール・ミッション（以下、SM）とスクール・ポリシー（以下、SP）を策定した（**図1**）。委員の1人の江間啓之副校長は、策定の過程をこう語る。

「例えばグラデュエーション・ポリシーは、検討委員会に先立ち、委員ではない教師からも生徒に身につけてほしい力について聞き取り、最終的に3つの力とした案を作成しました。『〝イノベーション〟など、カタカナの言葉は教師にも生徒にも分かりにくいのではないか』『〝○○力〟などと表現は統一した方がよいのではないか』というように、文言にもこだわりました。また、校内での議論は職員室の隣にあるガラス張りの部屋で行い、委員以外の教師に議論の様子が見えるようにしました」

図1　スクール・ミッション、スクール・ポリシー（抜粋）

■スクール・ミッション
地域社会に貢献する未来の静岡の創り手を育むため、「つながる学び×つかえる学び」を通して、自己を律する力、共に創り上げる力、突破する力を育成します。

■スクール・ポリシー（グラデュエーション・ポリシー）
- **自己を律する力**　他者への配慮ができ、主体的に目標を設定し、達成に向けてひたむきに取り組む。
- **共に創り上げる力**　自他の考えを尊重し、対話を通して仲間とともに課題解決に導き、その喜びを共有する。
- **突破する力**　柔軟な発想と行動で自己の限界を打ち破り、自他の幸福を追求する。

※学校資料を基に編集部で作成。

学校概要

設立　2013（平成25）年
形態　全日制／普通科、商業科／共学
生徒数　1学年約240人
2025年度卒業生進路実績　国公立大は、山梨大、静岡大、愛知教育大、三重大、東京都立大、山梨県立大、静岡県立大などに23人が合格。私立大は、中央大、法政大、明治大、早稲田大、南山大、関西大などに延べ246人が合格。短大・専門学校進学43人。就職40人。



校長
坪井保人
つぼい・やすひと
同校に赴任して1年目。



副校長
江間啓之
えま・けいじ
同校に赴任して4年目。



進路課長
金原直樹
きんぱら・なおき
同校に赴任して7年目。
数学科。3年部。



研修課長
小泉龍馬
こいずみ・りょうま
同校に赴任して9年目。
数学科。3年部。



商業科長、研修課
小泉真由子
こいずみ・まゆこ
同校に赴任して6年目。
商業科。3年部。

変革の一手

2学科の混合チームで取り組む探究学習に転換

24年度は具体的な改革に着手した。検討委員会の委員だった教師や、前校長が指名した研修課の小泉真由子先生、教務課（当時）の小泉龍馬先生、進路課長の金原直樹先生らから成る「魅力化小委員会」（以下、小委員会）を校内に設置し、SMやSPの実現に向けて何をすべきか、議論した。課題は、取り組む内容の検討もさることながら、2校の統合校の教師が合意形成を図ることだった。そこで、全教師が参加する校内研修を何回も実施して改革の方向性を共有しつつ、総合的な探究の時間（以下、総合探究）の刷新や単元テストの導入、教育課程の改編、進路指導の見直しなどを少しずつ進めていった。主軸となった取り組みを順に見ていく。

総合探究では、小泉真由子先生と小泉龍馬先生が22年度から進めてきた改革を加速させた。

「本校の総合探究は21年度まで、学年部ごとに担当する体制を採っていましたが、総合探究を本校の特色とするために、現行の学習指導要領が実施される22年度に全校体制に刷新しようと考えました。しかし、それでは先生方の戸惑いが大きいのではないかと思い直し、22年度は私と小泉龍馬先生が受け持っていた2年生で、外部のコーディネーターの力も借りて地元企業と連携する探究学習を導入し、23年度は持ち上がった3年生で自己探究に取り組む探究学習を実施しました。そして1年生の担当となった24年度に、学校全体での刷新に踏み切りました」（小泉真由子先生）

まず、各学年部で2人の教師が総合探究の担当となり、研修課と各学年部が連携する体制を整えた。そして、総合探究の3年間の指導計画の作成にも着手。1年次はグループ探究とし、「静岡市の持続可能な開発」「パラスポーツ」など、6つのテーマから生徒は自分が興味・関心のあるものを選び、各テーマ内で2学科の生徒が混合のチームを組み、地元企業から助言を得ながら取り組む探究学習とした。2年次は生徒が自分で設定した課題について探究する個人探究とし、3年次は過去の出来事と関連づけながら将来の自分を展望したスピーチを行う自己探究とした。

改革後の総合探究の最大の特色は、2学科合同で活動に取り組む形にしたことだ。教師からは当初、「2学科合同で行う意味はあるのか」「普通科と商業科では探究テーマが合わない」といった声が上がったと、現在研修課長を務める小泉龍馬先生は語る。

「2学科合同の活動とすることに慎重な意見も出ましたが、前校長が『これは本校の特色になる。まずは実践してみよう』と判断しました。そして、専門が異なる生徒が一緒に活動すればSMに掲げる『共に創り上げる力』が育成されることや、専門的な学びの『課題研究』と自身のあり方・生き方を追究する総合探究とでは目的が異なることなどを繰り返し説明し、時間をかけ

「これは**本校に必要**な取り組みだから」。その言葉で実施に踏み切れた

お勧めの分掌・
管理職
教務担当
進路担当
担任

て新たな形への共通理解を図っていきました」

単元テストを導入し、教育課程は3年間で6単位減に

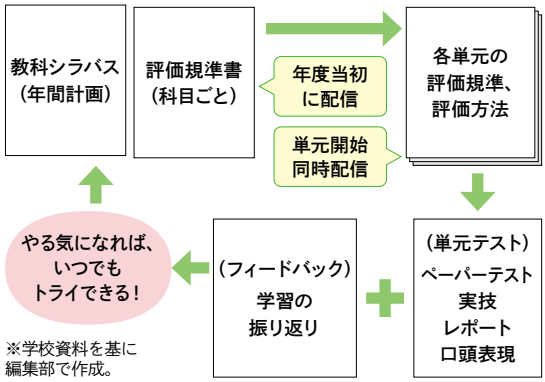
自律した学習者の育成に向けて、定期考査を廃止し、単元テストを導入した。24年度は一部の教科・科目で単元テストを試行し、25年度は全教科・科目に展開。各教科・科目の特性に応じたパフォーマンス課題も導入し、学習評価の多面化・多角化も図った。

「定期考査では、考査の前だけ集中して勉強し、考査を乗り切る生徒が少なくありませんでした。そこで定期考査の代わりに単元テストを実施することにしました。単元テストは定期考査に比べて出題範囲が狭く、学習や振り返りがこまめにしやすいため、学習内容が着実に定着するのではないかと考えました。生徒が『分かった』と自分の理解を実感できれば、『もっと知りたい』といった学習意欲の向上にもつながると期待しました」（江間副校長）

同校の単元テストは「自習20分間＋テスト30分間」など、テスト時間は20～30分間を目安とし、前時やテスト前には自習時間を設ける形に統一。年度当初に全教科・科目のシラバスを配布し、単元開始時には該当単元の評価規準と評価方法を明示して、生徒が自分で学習のサイクルを回せるようにした（**図2**）。当初は「学習のペースがつかめず、大変」といった声が生徒から多く上がったが、今では「学習習慣が身についた」「毎日の授業の大切さを実感している」といった声が上がっている。

また、「生徒の主体性を尊重し、生徒に時間を返す」という方針の下、教育課程を改編した。改編前の履修単位数は2学科とも各学年32単位（LHRを含む）だったが、改編後は30単位とした。さらにDXハイスクールの指定校として「情報Ⅱ」を設置し、普通科でも商業科の専門科目2科目を履修できる仕組みにした。改編案は教務課が中心となって作成。各教科内で検討した内容を各教科の代表者による会議で議論し、その結果を各教科に持ち帰ってまた検討するといったプロセスを繰り返した。7案目で合意に達し、26年度から各学年30単位の教育課程を実施している。

図2　単元テストを軸とした学習サイクル



※学校資料を基に編集部で作成。

「普通科には特別進学クラスを1年次から1学級設けていたため、改編しても国公立大学の一般選抜に合格する学力を担保できるのか、校内で議論しました。その結果、特別進学クラスは維持し、3年間で6単位減らしても合格に必要な学力をしっかり育む教育課程とすることにしました。ただ、SMに掲げる『共に創り上げる力』の育成を踏まえて26年度からは、特別進学クラスの設置を2年次からに変更し、1年次は生徒が多様な仲間と日常的にかかわり合えるようにしました」（金原先生）

生徒に時間を返すからこそ、将来をじっくり考えさせる

進路指導も自律した学習者の育成の観点から見直した。それまで週末課題としていた進路学習はLHRに組み込み、キャリア意識を高める講演や大学・学部研究などの時間をキャリアナビ（＊1）を取り入れながら大幅に増やした。

「なりたい自分が明確になると、人は主体的に学ぶようになります。生徒に時間を返したのは、生徒が自分の将来について調べ、じっくり考えることで明確な目標を持てるようにする活動が生徒に必要だったからです」（金原先生）

そして、面談週間や講演会、模擬試験など、1～3年次の進路指導の流れと各指導において重要な点を普通科・商業科それぞれについて示した「進路指導概要」を作成。教師間で指導の目線を合わせ、生徒を支援するタイミングがクラス間でずれないようにした。

「各教師の個性を生かした指導や、生徒の状況に合わせたアプローチを尊重しつつ、面談で生徒や保護者に伝えるべき事項や生徒に声をかける時期など、本校の進路指導で大切な点については目線が合うよう、進路指導概要の文言や見せ方を工夫しました」（金原先生）

なりたい自分があるからこそ自ら学ぶ。生徒が自分の将来を**じっくり考える**活動が必要だった

＊1　ベネッセが提供する、進路・探究・表現学習を統合的に支援するデジタル教材。
＊2　ベネッセが提供する、「学校の授業・指導」「生徒の学習」支援のためのICTプラットフォーム。

変革の成果と展望

変化を恐れず挑戦できる学校文化に

一連の改革を経て、教師の意識は変化してきている。

「検討委員会や小委員会での議論、校内研修などを経て、学校をよりよくしていこうとする教師一人ひとりの意識の高まりを感じています。いくつもの新たな取り組みを進めていく中で、既存の方法にこだわらず、変化を恐れずに挑戦する文化が少しずつ醸成されているのかもしれません」（江間副校長）

例えば今年度の3年生の総合探究では、人気テーマパークの元スタッフによる、「企業が求める人材」をテーマとした講演を行った上で、そのテーマパークを遠足で訪れ、プロの仕事を肌で感じ、学んだおもてなしの精神を文化祭の一般公開で発揮するという活動を行った。

「2学科合同で総合探究と学校行事が連動する活動を提案したところ、先生方から以前のような戸惑いの声が出ることはなく、各部署から『本校ならではの取り組みだ』と賛同を得て実施できました」（小泉龍馬先生）

そうした学校全体の改革を後押しようと、今年度着任した坪井保人（やすひと）校長は、自身の考えを発信する「勇気づけ通信」を教師に毎月配布している。

「学校全体で同じ目線で目標に向かうことは難しいものです。例えば単元テストについて、『テストの実施回数が増えたことで、作問の負担が大きくなっている』といった声もあります。そこで、『自律した学習者の育成に向けて日常的に学習することへの意識づけが図れるのが単元テストです』と伝えています。校長である私が取り組みの価値を発信することで、先生方が前向きに取り組めるようにしています」（坪井校長）

生徒も変化しつつある。「生徒全員が楽しめる体育祭になるよう、種目を変更したい」と体育祭実行委員会が職員会議で内容変更を提案。教師と議論した結果、24年度から種目を変更した。

また、文化祭の一般公開は「自分たちが楽しむもの」から「来場者をもてなすもの」へとプログラムが変化しつつある。

学力面も変化の兆しが見られる。模擬試験では例年、2年次の7月から11月にかけて成績が下がる傾向にあったが、25年度の2年生は堅調に推移し、1年生も同期間で成績を維持した。模擬試験実施の2週間前から、Classi（＊2）で問題配信を行うなど、新たな試行が生徒の学習意識や学習習慣にどう影響するのか、今後の動きも注視している。

「今後は、この2、3年間で挑戦してきた新たな取り組みの質の向上と定着に注力し、本校独自の価値を築いていきたいと思っています」（坪井校長）

変革の軌跡を振り返って

丁寧な対話と地道な声かけの積み重ねによって、変化が起きた



小泉真由子先生

本校に赴任した1年目に総合探究の担当を任されました。当時は学校全体の指導計画がなく、だからこそ新しい価値を創り出す好機だと捉えました。ただ、学校全体をいきなり変えるのは難しいと考え、小泉龍馬先生と「数年後に頑張ってよかったとなればいいよね」などと励まし合いながら、1学年ずつ活動を改善していきました。

本校の生徒の課題である自ら考えて動く力を育む、社会とつながる学びを実現するためには、探究学習の改善は不可欠でした。しかし、それまでの指導が通用しづらくなるため、学校全体での共通理解をどう図っていくか、頭を悩ませました。初期段階で外部のコーディネーターに入ってもらったのは、現場の教師と私たち運営側との間を客観的な視点でつないでもらうためです。また、探究学習を担当する他校の先生方と対話を重ねることで自校の取り組みを客観視し、その意義を再確認しました。

探究学習の価値や手法を浸透させるため、研修やイベントも実施しました。最初は4、5人ほどしか参加者はいませんでしたが、関心がありそうな先生に地道に声をかけるうちに参加者は少しずつ増えていきました。そうして互いの価値観を語り合える雰囲気が生まれていきました。

価値観の異なる教師間で根気強く対話を重ね、目的を共有できたからこそ、多様な意見をよりよい学校づくりのための推進力に変えられる今の体制が構築できたと思っています。反対意見も含め、生徒の未来を思って積み重ねてきたすべての議論に意味があったと確信しています。

お勧めの分掌：管理職／教務担当／進路担当／担任

Web VIEWnext ONLINE 関連記事はこちら！
今回のテーマに関連する過去の記事は、教育情報総合サイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。
2025年11月号　指導変革の軌跡　千葉県・私立東葉（とうよう）高校
▶https://cdn.view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article34122/

シリーズ

高×大専社

接続の視点で考える

社会の変化に対応する人材の育成に向けて、大学や専門学校では新たな教育プログラムや入試改革が進んでいる。本コーナーでは、今後の教育において重要なキーワードについて、高校と大学・専門学校・社会の接続の視点で考えていく。

キーワード

非認知能力

社会が求め、大学が重視する「非認知能力」

ベネッセi-キャリアが実施した「企業の『新卒採用動向』における調査2025」と「大学キャリアセンターの学生キャリア支援における調査2024」によると、採用にあたって企業が評価する力（前者の調査が対象）と、大学が評価してほしいと考えている力（後者の調査が対象）は、いずれも1位が「人柄・性格」、2位が「自社（志望企業）への熱意」、3位が「汎用的スキル」と、上位3つが一致した（**図1**）。1位の「人柄・性格」は、主体性やコミュニケーション力、レジリエンス（回復力）など、職場の多様な人々と協働し、困難を乗り越えて成果を出す上で重要となる非認知能力に密接にかかわっていると考えられる。

非認知能力は、他者とのかかわりや様々な経験、その振り返りなどを通して育まれる側面が大きい。そうした力を育む機会の1つとして近年、各大学が力を入れているのが、企業と連携して課題解決や製品開発などに取り組む「課題解決型学習（PBL（＊1））」だ。文部科学省の「令和5年度の大学における教育内容等の改革状況について」によると、教育課程内でPBLを実施する大学は約45％に上る。多様な他者とかかわりながら試行錯誤を重ね、答えが1つではない問いに挑むPBLの実施は、学生の主体性と協働性などを育むとともに、大学が社会との接続を重視していることの表れとも言える。

認知能力と非認知能力は独立したものではなく、相互に影響し合う関係にあると考えられている。例えば、課題に粘り強く取り組む忍耐力や「できるようになりたい」という意欲、計画に基づいて集中して取り組む自己コントロール力といった非認知能力は、学習を継続させ、認知能力を高めていく上での支えとなる。一方、学習を通して「分かった」「できた」という実感を得たり、自ら考えて問題を解決したりする経験が、自己肯定感や主体性などの非認知能力を育むこともある。そのように、認知能力と非認知能力は、学びの中で相互に作用しながら育まれていくものと捉えることができる。

非認知能力の重要性と、非認知能力と認知能力の相互に影響し合う関係を踏まえれば、両者を一体的に育む教育は、大学だけではなく、中学校や高校、専門学校など、様々な教育段階で今後一層重要になるのではないだろうか。次ページからは、非認知能力と認知能力を密接に関連しているものと捉え、両者を中学校や高校の段階から中長期的な視点で育成している先進事例を紹介する。

図1　企業における「選考基準」と大学の「学生を評価してほしい観点」

企業		
#	項目	割合
1	人柄や性格	59.5%
2	自社への熱意	43.5%
3	汎用的スキル（思考力，問題解決力等）	42.6%
4	採用ポジションへの適性	40.3%
5	専門的スキル	32.3%

大学		
#	項目	割合
1	人柄や性格	92.8%
2	志望企業への熱意	70.0%
3	汎用的スキル（思考力等の問題を解決する力）	66.4%
4	正課外の経験	43.3%
5	スキル、資格以外の大学・大学院で身につけた専門性	39.7%

※出典　ベネッセi-キャリア「大学キャリアセンターの「学生キャリア支援」における調査2024」

＊1　Problem Based LearningあるいはProject Based Learningの略。

ベネッセ教育情報センター

学校事例

育成を目指す「未来学力」を定義し、教育活動の改善と成果検証に取り組む

宮城県・私立東北学院中学校・高校

非認知能力を育成する学校の新しいあり方を追求

創立140年の伝統を誇る宮城県・私立東北学院中学校・高校は2022年度、教育内容を大きく見直す学校改革に着手した。「多様な人々との協働が一層求められる社会になっていくことを見据え、本校でどのような教育を行うべきか、全教職員で話し合いを重ねた」と、当時の様子を帆足直治（ほあしなおじ）校長は振り返る。

「話し合いの結果、中学校、高校はもちろん、大学や社会でも学び続けられる人になるには、これまでの学校教育で重視してきた学力だけを追求するのではなく、中学・高校の段階で多様な人々と協働し、自ら問いを立ててその解決を目指し、新たな価値を生み出す力を身につけることも必要だという共通理解が生まれました」

同校の教職員たちは、これまで重視してきた学力である認知能力と、他者と協働したり、自ら問いを立てたりする力、いわゆる非認知能力は、相互に高め合うものであり、生徒にとって車の両輪のような不可分なものと捉えた。そして認知能力と非認知能力を中高6年間でどのように育成していくのか、議論を続けた。

「未来学力（＊2）はどのような力で構成され、日々の授業や特別活動などでどのように育成されるのか、そして授業や学校行事をどのように改善すれば、それらの力の育成が促進されるのかについて話し合いました」（髙橋裕一教頭）

議論を経て、未来学力は「多様性」を尊重する姿勢、「主体性」、「創造性」で構成される資質・能力であると定義され、その育成が図られることになった（**図2**）。以来、教師がチームで取り組む「教わる授業」から「学ぶ授業」への授業改善、生徒による意思決定を尊重する部活動改革、生徒主体の学校行事の運営など、未来学力の育成に向けた施策を打ち出してきた。未来学力の育成の場として中でも重視しているのが、大学と連携した探究学習だ。

同校の総合的な探究（学習）の時間では、持続可能な開発のための教育ESDである「3L希望学」を中高6年間で展開しているが、26年度からはデータサイエンスの活用を重視し、東北学院大学から約40人の教員を生徒の相談役として迎え、中高大連携の探究学習を行うよう、再整備を進めている。また、23年度から東北学院大学と連携してスタートさせた「アントレプレナーシップ入門塾」では、高校生が大学生とともに、地域課題について大学教員の指導を受けながら探究する。異年齢の仲間や地域の多様

図2 認知能力と非認知能力をともに高めて育む「未来学力」



※学校資料をそのまま掲載。



校長
帆足直治
ほあし・なおじ
同校に赴任して38年目。



教頭
髙橋裕一
たかはし・ゆういち
同校に赴任して32年目。



進路部長
小黒智之
おぐろ・ともゆき
同校に赴任して29年目。英語科。



教育研究部長
武田誠
たけだ・まこと
同校に赴任して6年目。英語科。

学校概要

設立 1886（明治19）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数（全日制） 中学校約180人・高校約360人（いずれも1学年）
2025年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、宮城教育大、山形大、福島大、埼玉大、東京科学大、宮城大などに78人が合格。私立大は、上智大、慶應義塾大、中央大、東京理科大、法政大、立教大、早稲田大、同志社大などに延べ427人が合格。

＊2 東北学院中学校・高校が定義する、「多様性」「主体性」「創造性」の3要素で構成され、認知能力と非認知能力をともに高めて育む資質・能力のこと。

お勧めの分掌
管理職
教務担当
進路担当
担任

な人たちとの協働を通じて、創造性や思考力を高めていく。

「3L希望学、アントレプレナーシップ入門塾のいずれにも、教室では体験できない学びが多くあります。多様な人たちとかかわりながら生徒たちが未来学力を身につけていることがよく分かります」（教育研究部長・武田誠先生）

大学や実社会と連携した学びの質を高めるために、同校では探究学習に関連するフィールドワーク、企業訪問、地域の行事への参加を今まで以上に推進する予定だ。

育成を目指す資質・能力をアセスメントで可視化

育成を目指す資質・能力を未来学力として定義し、その育成のための教育活動の充実を図ってきた同校は、その成果を検証するために、「GPS-Academic（＊3）」を中学・高校の全学年で導入した。

「未来学力の育成の視点で生徒を見た時、確かに成長しているという手応えを感じていましたが、それを数値化できれば、教師も生徒も学校が育成を目指す資質・能力をより認識しやすくなり、それぞれの意識や行動の改善につなげられると考え、『GPS-Academic』を導入しました」（帆足校長）

生徒が未来学力を高めていくためには、教師から与えられたタスクをこなすような学びではなく、生徒が自分にはどのような非認知能力が不足しているのかを自覚し、主体的に行動していくことが不可欠だと帆足校長は考える。

図3「GPS-Academic」による「未来学力」の可視化

「GPS-Academic」で計測する指標	多様性	主体性	創造性
批判的思考力			
協働的思考力	○		
創造的思考力			◎
感情の制御	○		
立ち直りの早さ		○	
状況に応じ冷静に対応する		○	
自ら先頭に立って進める		◎	
未知のものに挑戦する			○
粘り強くやり抜く			○
相手の立場に立とうとする	◎		
他者と関わろうとする積極性	○		
多様性を受容する経験	◎		
関係性を築く経験			
議論する経験			
課題を設定する経験		○	◎
解決策を立案する経験			○
実行・検証する経験		◎	

※学校資料を基に編集部で作成。

「私たち教師が生徒の未来学力を育成するためには、本校の生徒がどのような非認知能力が高く、どのような非認知能力に伸びしろがあるのかを把握し、自分の担当する授業や活動を具体的に改善していくことが必要です。生徒、教師双方にとって、非認知能力の育成状況の可視化の意義は大きいと考えました」（帆足校長）

26年7月には「GPS-Academic」の受験結果を基にした研修会を開催。全教師が参加し、「GPS-Academic」で測定する17の指標を、未来学力を構成する「多様性」を尊重する姿勢、「主体性」、「創造性」に紐づけ（**図3**）、学年・コースごとに生徒の特徴を分析した。教師からは、「未来学力は中長期的に育むものであることが分かった」「周囲の意見に耳を傾けながら自分の考えを深める時間を、授業において継続的に確保していきたい」といった声が上がった。

「生徒の希望進路の実現のために、今後は『GPS-Academic』の結果を踏まえた面談にも力を入れていきます。教師が『GPS-Academic』で生徒を多角的に見取り、未来学力の向上が確かめられれば、成績が伸び悩んでいる生徒であっても、その生徒の学びの意欲を高めることができると考えました」（進路部長・小黒智之先生）

未来学力を育むための教育環境を充実すべく、高大連携も進めていく考えだ。既に「GPS-Academic」を導入している東北学院大学と連携し、中学・高校から大学までの生徒の非認知能力の変化を継続して把握し、それを大学での学修計画などに生かす取り組みが進められている。さらに25年度には、東北学院大学と東北学院高校、東北学院榴ケ岡高校が連携した「中高大一貫教育事業」の一環として、「GPS-Academic」を活用し、生徒一人ひとりが自分の強みを将来の学びや進路にどう生かすかを考えるワークショップを開催。東北学院大学の教員がファシリテーターとなって、高校生に大学進学から大学卒業後までを見据えた長期的な成長イメージを描かせる機会も設けた。

「卒業生に対して、本校で身につけた資質・能力のうち、大学や社会で特に役立っている資質・能力や周囲の人よりも秀でていると思える資質・能力などについて尋ねる追跡調査を実施することも考えています。卒業生からも本校の教育に対する振り返りを得ながら、中学校や高校だけでなく、大学や社会でも必要となる非認知能力の育成についての理解を深め、中・高・大を接続した非認知能力の育成のロードマップの土台を構築したいと考えています」（帆足校長）

＊3 ベネッセが提供する、「思考力」「姿勢・態度」「経験」の3つの観点から、問題発見・解決する力を測定し、生徒一人ひとりの「強み」を明らかにするアセスメント。

今後の高×大・専・社の接続に向けて学校に求められること

中長期的な視点で 認知能力と非認知能力を相互に高める

学校事例としてご紹介した東北学院中学校・高校は、2022年度に行った学校改革の中で、育成を目指す資質・能力を「未来学力」と定義し、従来から重視していた学力である認知能力に加え、非認知能力を中高6年間で育成する方針を掲げました。そこで注目すべきは、非認知能力は認知能力に取って代わるものではなく、両者が相互に作用しながら育まれるという点です。

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2023-2025」によると、高校生のいずれの学年においても、非認知能力である「粘り強さ」「挑戦心」の高い生徒ほど、認知能力が比較的問われるテストの成績が高くなる結果が見られました。（図1）

現在、審議まとめの段階にある次期学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現を通じて、自らの人生を舵取りする力と、民主的で持続可能な社会の創り手を育成するために、『「好き」（興味・関心）を育み、「得意」を伸ばす」ことと「当事者意識を持って、自分の意見を形成し、対話と合意ができる」ことが有機的にかかわり合い、両輪として高まっていく教育課程の実現を目指すことになる見通しです。そこでポイントとなるのは、探究の原動力となる「好き」や「当事者意識」と、それを深い思考や表現へとつなげる「得意」や「知識・技能」が別個のものではなく、相互に支え合う関係にある点です。そのように、認知能力と非認知能力を相互に関連づけながら育んでいく視点が、今後の高×大・専・社接続の核となるのではないでしょうか。

また、年内入試による大学入学者が増加する中、私は2つの空白期間に注目しています。

1つめは、年内入試合格後から高校卒業までの期間です。その期間に大学側が合格者に対して事前課題を出したり、学習ツールを提供したりする「入学前教育」は一般的になりました。大学入学前に進路決定者が主体的な課題学習や準備に取り組むことは、進路決定後の学習意欲や自己調整力（非認知能力）の低下を防ぎ、大学での学びにスムーズに入っていくために必要な知識・思考力（認知能力）を定着・維持させることにつながります。

2つめは、高校時代に高まった探究に対する意欲が教養科目中心の大学1年次の学びの中で分断されがちな「探究の空白期間」です。近年増えつつある高校在学中に参加できる大学の探究プログラム（名古屋大学理学部・総合型選抜、九州大学・総合型選抜「次世代研究者発掘入試」など）や早期探究型の入試制度は、高校で培った挑戦心や当事者意識を途切れさせず、大学での高度な専門知の獲得へと引き上げる役割を果たします。 そのように、2つの空白期間を「認知能力と非認知能力の相互作用を持続させる期間」と捉え直すことで、校種間連携の新たな可能性が開かれるのではないでしょうか。

以上のような点からも「高×大・専・社接続」の重要性は今後ますます高まっていくと考えられます。次号の本コーナーもぜひご期待ください。

（株）ベネッセコーポレーション
学校カンパニー 教育情報センター長
渡辺健太 わたなべ・けんた



図1 高校生における非認知能力と認知力の関係

	1年生	2年生	3年生
成績と粘り強さの関係	成績 ↕ 0.220 粘り強さ	成績 ↕ 0.222 粘り強さ	成績 ↕ 0.145 粘り強さ
成績と挑戦心の関係	成績 ↕ 0.185 挑戦心	成績 ↕ 0.174 挑戦心	成績 ↕ 0.139 挑戦心

いずれの学年でも、非認知能力である「粘り強さ」「挑戦心」の高い生徒ほど、成績が高くなる結果が見られた。

※「粘り強さ」は「一度決めたことは最後までやり遂げる姿勢」、「挑戦心」は「難しいことや新しいことにいつも挑戦したい姿勢」を示す。
※数値は相関係数。いずれも統計的に有意であった。

＊出典　東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2023－2025」

Web VIEWnext ONLINE 関連記事はこちら!
今回のテーマに関する過去の記事は、教育情報総合サイト『VIEW next ONLINE』でご覧ください。
2024年8月号 「見えない力」を言語化すると、生徒の意識や行動が変わる
▶https://benesse-hs.jp/sv2dc

ウェブ連載記事 ダイジェスト

弊誌のウェブサイト『VIEWnext ONLINE』には、サイトのみで連載しているコーナーがあります。ここでは、「『主体的・対話的で深い学び』を実装する授業デザイン」「『やらされ探究』から『マイ探究』へ」「そうだったのか！教育課程」の3つの連載コーナーの最新記事の概要をお伝えします。

各記事の全編には、２次元コードからアクセスするか、https://view-next.benesse.jp/ にアクセスし、「学校教育情報誌『VIEW next』」>「ウェブオリジナル記事」からご覧ください。

学校教育情報誌『VIEW next』 高校管理職・教師向けお勧めテーマ 小・中学校 教育委員会向けお勧めテーマ
高校版バックナンバー 教育委員会版バックナンバー ウェブオリジナル記事 クリック！

「主体的・対話的で深い学び」を実装する 授業デザイン

歴史総合

対話を軸とした単元構成で、自分の考えを多面的・多角的、本質的に深められる生徒を育む

福井県立若狭高校 松村一太朗



まつむら・いちたろう
同校に赴任して7年目。SSH研究部。地理歴史・公民科（世界史、公共）。1学年担任。

生徒とは異なる視点の意見を投げかけ、思考を揺さぶる

人口減少に伴い、国力の維持・活性化が課題となっている日本において、主権者としての自覚を持ち、よりよい社会を創り出す人材を育てたいという思いから、地理歴史・公民科の教師になったという松村先生。同校が掲げる「『異質のものに対する理解と寛容の精神』を養い、教養豊かな社会人の育成を目指す」という教育目標は、松村先生の思いとも深く重なる。

松村先生は、生徒が主権者として社会への関心を高め、政治や社会課題について議論する素養を身につけてほしいと考え、担当する「歴史総合」の授業で「対話」を取り入れている。単元構成は、①基礎知識の習得、②自分の考えの形成、③対話を通じた異なる意見・立場との出合い、④自分の考えの深化と言語化というプロセスを踏むように設計し、生徒が自分の考えを持った上で対話に臨むことで、議論が深まり、より熟考できるように工夫している。

例えば「近代化と私たち」の単元では、日清・日露戦争が起きた背景などを生徒が学んだ上で、２つの戦争の賛否を起点にした対話を実施した（写真）。対話する前は、「国益を守るために戦争は必要だった」と、日清・日露戦争に賛成する生徒が大半を占め、戦争は必要なかったという生徒は少数だった。そこで対話の班を、戦争に賛成する生徒と反対する生徒が混ざるように編成。そして松村先生は「日清・日露戦争に賛成するのならば、現在の戦争と何が違うのか。戦争に善悪はあるのか」と問いかけ、対話の中盤には日本を主語とする見方とは異なる立場があることに気づかせようと、「被害を受けた国の立場で考えるとどうか」と問いかけたところ、多角的な議論へと発展していった。単元末の振り返りでは、自分の考えの変容をメタ認知する記述や主権者としての姿勢に関する記述が見られた。

本記事の全編では、生徒が対話を通じて考えを深めていくための工夫や生徒の対話の内容などのほか、「歴史総合」と同様に対話を取り入れている同校の国語科・英語科の授業デザインについても紹介している。



写真　単元の最後の授業で行う対話は、生徒４～５人で班を編成し、そのうち１人の生徒がファシリテーターとなって進める。

本記事の全編には、下の2次元コードからアクセスしてください。

「主体的・対話的で深い学び」を実装する
授業デザイン
物理

「7つの行動目標」で、他者と協働して課題に取り組む意識づけを図る

大阪府・私立追手門学院中・高校 土谷啓介



つちや・けいすけ
同校に赴任して計8年目（同校赴任は2回目。1回目は6年間勤務）。主幹教諭。理科（物理）

協働的な学びを通じて非認知能力の育成を図る

「生徒一人ひとりが科学者のように思考し、クラスメートと協働しながら学びを深めることを通じて問題解決力を身につける」授業を目指していると語る土谷先生。「科学者のように思考」するとは、習得した知識を活用して物事を論理的・実証的に思考することだ。加えて、予測困難な時代を生きる生徒にとって、主体的に行動する力や他者と粘り強く問題解決に取り組む力などの非認知能力の育成も不可欠だと土谷先生は考えている。

土谷先生の授業はまず、年度初めや定期考査後にオリエンテーションを行い、次の定期考査の出題範囲を生徒に提示する。それは生徒が見通しを持って自己調整しながら学べるようにするためだ。そして日々の授業は、冒頭の約10分間が土谷先生からのその日の学習の要点についての説明の時間、残りの40分間が問題演習のプリントに取り組む時間で構成している。プリントの取り組み方は生徒自身が選択するが、生徒が自分でプリントに取り組みつつ、他者と協働して学びを進められるよう、土谷先生は様々な工夫をしている。その1つが、「話す」「質問する」「説明する（教える）」「聴く」「動く（協力を求める）」「チームで協力する」「チームに貢献する」という「7つの行動目標」の提示だ（**写真**）。

土谷先生が約10年前、産業能率大学教授（当時）の小林昭文（あきふみ）先生のセミナーに参加した時に知った「態度目標」を参考に設定したもので、それを基に、授業中の机間巡視では「友だちに質問していますか」「自発的に動いていますか」などと生徒に声をかけて、生徒が「何を、何のために、どうやって学ぶか」を自覚できるようにしている。

本記事の全編では、「7つの行動目標」のほか、生徒が自己調整しながら協働的に学ぶようにするための、プリントの問題量や定期考査の出題における工夫、場面別の声かけ例などについても紹介している。

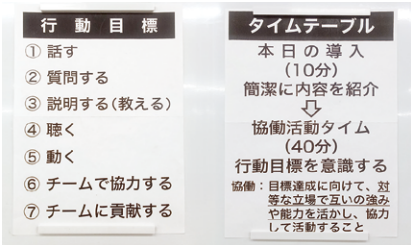


写真　授業を行う場所である物理室の壁には、授業の進め方を示した「タイムテーブル」と、7つの「行動目標」を掲示。土谷先生は毎授業の冒頭に、「7つの行動目標を意識してプリントに取り組もう」と伝えている。

本記事の全編には、下の2次元コードからアクセスしてください。

解説　授業づくりに関連する、次期学習指導要領における改善事項

2026年10月に中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において取りまとめられた「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」では、改訂の方向性の1つとして「主体的・対話的で深い学び」の実装が示されている。「主体的・対話的で深い学び」は現行学習指導要領において、資質・能力の3つの柱の育成に向けて「どのように学ぶか」という学習過程の質的改善を図る必要性から位置づけられたが、中でも「深い学び」は、多くの教師にとって各教科等の具体の文脈の中でイメージをつかみ取りにくいといった指摘があった。そうした課題を踏まえて同まとめでは、**「『知識及び技能に関する統合的な理解』『思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮』による資質・能力の構造化」「質の高い探究的な学び」「豊かな学びにつながる学習評価」「学習の自己調整や学習方略の指導等による個に応じた学習過程の充実」**などが具体的な改善事項として挙げられている。

そこで本コーナーでは、「主体的・対話的で深い学び」の実装に寄与すべく、具体的な改善事項に関連する授業改善に先進的に取り組む教師の授業実践を紹介している。目の前の生徒たちを、自らの人生を舵取りすることができる民主的で持続可能な社会の創り手に育てるために、「学びをデザインする高度専門職」として創意工夫を重ねることが求められるこれからの教師のあり方を、本コーナーを通じて考えていきたい。

お勧めの分掌
管理職
教務担当
進路担当
担任

「やらされ探究」から「マイ探究」へ!

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。
探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

生徒個人の「放っておけない課題」を重視し、公欠制度などの整備で生徒の探究学習を支援

長野県松本県ケ丘高校


探究科主任
中村祐介
なかむら・ゆうすけ


1学年探究科担任
押澤 慧
おしざわ・けい


2学年探究科担任
栢木駿輔
かやき・しゅんすけ


一般社団法人KOKO代表理事 探究コーディネーター
宮木慧美
みやき・さとみ

長野県松本県ケ丘高校の探究科では当初、SDGsの17の開発目標に基づいた課題を生徒が設定する探究学習を実施していたが、自分の興味・関心の追究と社会貢献の両立に悩む生徒もいた。そこで、SDGsをテーマとする課題の設定から、生徒が自分の興味・関心に基づいて課題を自由に設定する探究学習へと舵を切った。現在の同科の探究学習は、1年次前半にインタビューやデータ分析の方法を身につけ、その後、グループで地域の課題を探究する。2年次からの個人課題探究では、全員が自分で設定した課題を探究する。

個人課題探究の課題の設定の際には、「社会の役に立ちそうもないようなテーマ、自分以外の人は興味・関心を持たないようなテーマで課題を設定しても構わない」と、生徒に明確に伝えている。探究テーマの中には教師の理解の範ちゅうを超えたものもあるが、同校の教師たちは、そのテーマのどこを面白いと思ったかなどを生徒に尋ねることで、生徒の壁打ちの相手になっている。

本記事の全編では、探究学習のための欠席を公欠と認める制度や、2年次に全員が取り組む個別校外研修などの取り組みも紹介している。

本記事の全編には、下の2次元コードからアクセスしてください。

生徒、教師がともに活動の見通しを持ち、紆余曲折を大切にした探究学習を実現

静岡県立駿河総合高校


学校魅力推進課長
小泉亜衣子
こいずみ・あいこ


2年部学年主任
大井詳子
おおい・しょうこ


学校魅力推進課
渡邊奏太
わたなべ・かなた

静岡県立駿河総合高校の2年次の総合的な探究の時間では、生徒は防災をテーマに企業・機関と連携した探究学習に取り組む。当初は、ワークシートをとりあえず埋めるだけの生徒や、防災という大きなテーマを前に消極的な気持ちになる生徒もいた。また、そうした生徒の状況を変えようと、教師が具体的な活動内容を生徒に指示してしまうケースも見られた。

そこで同校は、学年団で使用する探究学習の授業案を改良。1コマの活動内容だけではなく、その活動が次時の活動にどのようにつながるのか、あるいはその日のうちに終わっておくべきものなのかといったことについても説明するようにし、教師が見通しを持って生徒に伴走できるようにした。また、生徒に対しては、探究学習の流れを年度当初だけでなく、年度の節目にも繰り返し説明するとともに、実際にアクションにつなげた先輩の事例を紆余曲折の過程とともに紹介し、試行錯誤していても道はいずれ拓ける可能性があることを伝えるようにした。

本記事の全編では、探究学習に取り組む生徒間の信頼関係を強固にするためのチームビルディングなど、26年度に導入した新たな実践についても紹介している。

本記事の全編には、下の2次元コードからアクセスしてください。

＼そうだったのか！／
教育課程
教育課程の柔軟化に向けて、先生方の疑問に答えます！

今号のテーマ

学校独自の教科・科目の開設

多様な子どもたちを包摂する教育課程の編成に向けて、現行の学習指導要領下でどのような取り組みが可能なのか。先生方の疑問にQ&A方式で答える本コーナー。今号は「学校独自の教科・科目の開設」をテーマに、学校設定教科・科目の開設と教育課程特例校について解説している。

1つめの質問では「学校設定教科・科目で開設できる教科や科目の内容と、それらを開設する意義」について取り上げた。学校設定教科・科目は、生徒や学校、地域の実態及び学科の特色などに応じて、学校が独自に開設できる教科・科目だ。生徒のニーズに応じた学びを提供できるとともに、共通教科・科目及び専門教科・科目では扱わない内容を教えることもできるため、特色ある学校づくりにつながる。学校設定教科・科目の名称や目標、内容、単位数などは、高校教育の目標に基づき、高校教育としての水準の確保に十分配慮した上で、各校が定めることができる。本記事の全編では、学校設定教科・科目の具体例や修得単位数の上限などを解説するとともに、3校における学校設定教科・科目の開設目的や内容についても紹介している。

2つめの質問では「教育課程特例校で編成できる教育課程と、特例校となるために必要な手続き」について取り上げた。教育課程特例校は、学校または地域の実態に照らし、より効果的な教育を実施するための特別の教育課程を編成することを認める制度だ。学習指導要領等に定められた必履修内容が適切に取り扱われていることなどを前提に、複数科目間での内容の移行・入れ替えが認められ、共通教科等・専門教科・学校設定教科のいずれの教科・科目間の移行・入れ替えにも制限はない。本制度を活用することで、生徒の実態や学校教育目標などに応じた柔軟な教育課程を編成・実施することができる。なお、本記事の全編では、教育課程特例校の具体例と、指定を受けるための手続きについても紹介している。

本コーナーの末尾では、次期学習指導要領において学校独自の教科・科目の開設に関する条件が弾力化される見通しを示している（**下記コラム**）。

本記事の全編には、下の2次元コードからアクセスしてください。

どうなる？ 次期学習指導要領

次期学習指導要領では教育課程の柔軟化に向けた方策の1つとして、現行の教育課程特例校などと同様に、必履修教科・科目を含む複数科目間での内容の移行・入れ替えが一定の要件の下で可能になる見通しです。具体的には、既存教科・科目の内容のみで構成される組み替え後科目については、学校設定教科・科目とは区別して「組替え後科目」等と呼称し、その単位数の上限は設けないこととするとともに、組み替え後科目が学校設定教科・科目の内容を含む場合のみ、学校設定教科・科目として取り扱う方向で検討されています。

学校設定教科・科目の修得単位数の上限は、普通科では、卒業に必要な単位数74単位の4割程度にあたる28単位（現行より8単位増）とする見込みです。一方で、「地域社会学科」などの「その他普通教育を主とする学科」では、普通教育に加え、学校設定教科・科目等の開設・履修による特色ある教育課程の編成を求めているため、卒業に必要な単位数74単位から必履修教科・科目に必要な39単位を除いたすべて（35単位）を学校設定教科・科目に充ててよいこととする方向で検討されています。



監修
文部科学省 初等中等教育局
主任視学官
田村 学 たむら・まなぶ

お勧めの分掌
管理職
教務担当
進路担当
担任

Web VIEWnext ONLINE
特集「教育課程の柔軟化」の記事はこちら！

「教育課程の柔軟化」をテーマにした特集記事は、教育情報総合サイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。右の2次元コードを読み取るか、次の記事のタイトルをクリックしてアクセスしてください。▶**2025年度2月号特集「生徒の可能性を開花させる教育課程の柔軟化――何ができるのか？どう実現するのか？」**

off Shot



東京学芸大学の高橋純教授への取材の一幕（**写真**）。教授の説明を咀嚼し、概念化を図るべく、私の灰色のCPUが猛烈に稼働しています……と書いて親指が止まりました（最近、短い文章はスマホで書いています）。ポワロを気取って脳細胞をCPUに例えたけれど、生成AIのコラムとしては画竜点睛を欠くのではないか。生成AIは人間の「内」ではなく「外」で稼働しているイメージだからです。

内田樹氏によれば、基幹産業が変わると流通する語彙も変わるそうです（＊）。子どもの成長に「めばえ」「実り」を重ねる比喩は、農業が基幹産業だった時代に教育界に定着し、時代の変遷とともに、「効率」「生産性」「汎用性」という言葉の使用頻度が増えたとのこと。

さて、生成ＡＩ時代にはどんな語彙が日常化するのかと考えるうちに、CPUは違うなと、「外」に向けた視線が「内」に戻ってきました。案外「概念化」「身体化」のように、人間の知性や身体に光をあてる言葉が増えるのでは。写真通りにしわの寄った眉間を揉みつつ、校了後はマッサージに行きたい私です。（河野）

＊ ウェブサイト「内田樹の研究室」2025年1月16日。

VIEWnext公式アカウント

LINE@

友だち募集中！

『VIEW next』のLINEを友だち登録していただければ、本誌の発刊時や新コンテンツの公開時に通知が届き、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』内の該当記事に、ダイレクトにアクセスできます。この機会にぜひ、友だち登録をお願いします！

[友だち登録の方法例]

- （方法①）上の2次元コードを読み取る
- （方法②）LINEアプリの「友だち追加」＞「ID検索」で「@view21」と入力して追加

VIEWnext

高校版 2027年1月号

1月25日発刊

（予定）

Reader's VIEW

先生方からのご意見を紹介します

2026年7月号へのご意見

特集を参考に教育活動の見直しと再構築を図りたい

7月号の特集の事例2 大阪府・私立大阪高校の記事を読み、「“オモロイ”18歳」という目指す生徒像の言語化や、オープンスクールでの生徒企画など、スローガンが実際の教育活動に結びついている点に感銘を受けた。生徒に分かりやすい言葉で目標が示されているからこそ、生徒主体のワクワクした活動が生まれているのだろう。また、特集全体を通じて、スクール・ポリシーに沿って「本当に目指す姿につながっているか」を見直すことの大切さを痛感した。「課題整理」の図3「自校の取り組みの現状を整理する4象限マトリクス」を活用して本校の取り組みを整理し、「本特集を振り返って」にまとめられていた特色化・魅力化を推進するステップを参考に、生徒・教師双方に分かりやすい方針の下での教育活動の見直しと再構築を校内に提案したい。 **静岡県立浜名高校・定時制 萩 一樹**

学校教育目標を踏まえて生徒と地域をつなげる

7月号の特集では、地域連携を学校の特色化や教育課程に位置づけ、行政と連携してプロセス重視の仕かけをする事例3 岩手県立葛巻高校の実践が参考になった。探究学習においてだけでなく、生徒が主体的に地域とつながるためには、教師の負担を抑えつつ、学校教育目標を踏まえて、行政やNPO、町内会などの関係団体と生徒を結びつける工夫が必要だ。公立高校の管理職である私にとって、高校の特色化・魅力化は、社会が変化する中で特に公立高校が果たすべき重要な課題だと考えている。 **広島県 匿名希望**

自分ならどう答えるか、深く考えさせられた

生徒と面談を行う際は、事前に成績や志望校などを把握し、希望進路の実現に向けた具体策を生徒と一緒に考える場にするように心がけているが、7月号の「先生なら、どうしますか？」の岩手県立水沢高校の佐藤紘大先生の記事を読み、生徒がその志望に至った背景にまで目を向け、より多くの情報を基に向き合うことが求められていると感じた。記事のように「東大に行ったら、私の人生の何が変わるんでしょうか？」と生徒から言われたら、自分ならどう答えるかと深く考えさせられた。

石川県・国立金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高校 宮崎亮太

2つの記事から考えた、高い目標とは何か

7月号の「指導変革の軌跡」の富山県立高岡高校の記事は、「高い目標とは何か」を突き詰めて考えるきっかけとなった。同号の「先生なら、どうしますか？」の記事にも共通するが、なぜ東京大学なのか、なぜ難関国立大学の合格者数で語るのか。「個別最適な学び」が提唱されていながら、大学のブランドに依存した価値観を前提にしていないかと疑問に思うと同時に、自省させられた。 **愛知県県民文化局学事振興課 野々山 新**

次期学習指導要領の理解に役立つ新連載

7月号の新連載「そうだったのか！ 教育課程」のウェブ連載記事には、次期学習指導要領の議論において、1単位をこれまでの約半分にあたる「17単位時間」とする新単位の導入が検討されていることなど、最新情報が解説されていた。次期学習指導要領の趣旨を理解するために大切なコーナーになるだろう。 **学校法人鈴鹿享栄学園 鈴木達哉**

VIEWnext 高校版

オンラインセミナー開催のご案内

プログラム１ ● 特別企画連動

次期学習指導要領「答申」を解説

●プログラムの内容　2024 年 12 月の文部科学大臣からの次期学習指導要領に関する諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」に対して、26 年冬に、中央教育審議会が答申する見通しです。管理職が次期学習指導要領に向けて押さえておきたい答申のポイントと今から着手しておきたいことについて、文部科学省の栗山和大教育課程企画室長が解説します。



文部科学省初等中等教育局
教育課程課教育課程企画室長
栗山和大（かずひろ）

プログラム２ ● 特集テーマ連動

生成 AI 時代 生徒の思考をどう深めるか？

●プログラムの内容　本誌 10 月号・特集「生成 AI 時代　生徒の思考をどう深めるか？」を振り返った上で、読者から寄せられた質問に対して、教育の情報化に関する研究に従事する東京学芸大学の高橋純教授と編集部が回答します。ご質問は、本セミナー申し込みフォームで受けつけています。



東京学芸大学
教育学部 教授
高橋 純

開催日時　2027年1月14日(木) 16:00～17:30

形式　オンライン（ZOOM 配信）　　**参加費　無料**

参加申し込み締め切り日
2027 年 1 月 13 日（水）

参加申し込み方法

右記の２次元コード、または下記 URL からお申し込みください。
https://benesse-hs.jp/VIEW2631

※お申し込みいただいた方に、詳しい参加方法をご案内します。　※登壇者の都合等により、配信内に録画再生を含む場合があります。
※一部時間帯の視聴も可能です。　※プログラムの内容は変更になる可能性がございます。あらかじめご了承ください。

過去のオンラインセミナーはこちらからご覧いただけます

視聴無料
※登録が必要です

「教師が主体的に動く学校に共通するリーダーのあり方」や「高校の特色化・魅力化を進める上で管理職に求められる視点や役割」について深めました。

4月号 特集テーマ連動
「なぜ、あの学校は人が動くのか？」
講師
帝京大学大学院教職研究科准教授
町支大祐（ちょうしだいすけ）
https://benesse-hs.jp/VIEW2612

7月号 特集テーマ連動
「どう進める？ 高校の特色化・魅力化」
講師
全国普通科高等学校長会事務局長 **佐藤 到（いたる）**
長崎県立佐世保南高校校長 **舟越 裕（ひろし）**
https://benesse-hs.jp/VIEW2622_2

お問い合わせはこちら

https://benesse-hs.jp/nm2gq

お急ぎの場合は、お電話もご利用いただけます。
株式会社ベネッセコーポレーション　お客様サービスセンター　TEL：0120-350455（通話料無料）
受付時間：月～金 8:00 ～ 18:00 ／土 8:00 ～ 17:00（祝日、夏季休業、年末・年始を除く）

生徒と創る学びの情景

教師と生徒全員で創る授業

高知県立高知国際中学校・高校　**徳橋佑哉**先生



国際バカロレア認定校として掲げる学校教育目標「国際社会の発展に貢献する人材の育成」に向けて、自分の考えや思いを伝える対話力を重視する徳橋先生。担当する化学では毎授業、２人の生徒がクラス全員の前で、事前に調べてきた授業の学習内容について発表する。「授業前に発表者が発表内容について相談に来ることもありますが、その際は私の考えにはめず、生徒一人ひとりの着眼点や表現の仕方の違いを大切にし、生徒と一緒に授業を創る気持ちで接しています」と語る徳橋先生。浸透圧を担当した生徒は、きゅうりを持参し、塩の量による水分の抜け方の違いを実演。生徒たちの記憶に残る学びとなった。「先生が『実演するのは面白いね』と背中を押してくれたので、思い切って発表できました」と、生徒は振り返る。

発表後は発表者と徳橋先生を含むクラス全員で質疑応答を行う。その場で答える緊張感や考えを巡らせる間が、対話力を鍛える。発表者が想定外の質問に詰まっていると、周りの生徒が調べて助け船を出す。「誰もが発表者になるからこそ、全員で協働して学びを創り上げるという意識で授業に臨んでいます」と話す生徒たち。伝え合い、協働する学びは、生徒が世界へと羽ばたくための礎を築いていく。

とくはし・ゆうや　同校に赴任して５年目。高校１学年主任。企画研修部。理科（化学）。
高知県立高知国際中学校・高校　2018（平成30）年設立／全日制／普通科、グローバル科／共学／1学年約280人／2025年度卒業生進路実績　国公立大は、東京外国語大、神戸大、高知大、九州大などに120人が合格。私立大は、同志社大、立命館大などに延べ187人が合格。海外大進学２名。

VIEWnext［ビューネクスト］高校版　2026年10月号　2026年10月20日発行　通巻417号　［発行人］田村隆憲　［編集人］柏木　崇　［発行所］株式会社ベネッセコーポレーション 学校カンパニー VIEW next 編集部　〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング
©Benesse Corporation 2026

『VIEW next』高校版に関するお問い合わせは　お客様サービスセンター
右記の2次元コード、または下記URLから
お問い合わせフォームにアクセスいただき、お問い合わせください。
https://benesse-hs.jp/nm2gq